

長岡京跡左京一条三坊十・十一町  
発掘調査報告書

2 0 1 8

株式会社 文化財サービス



## 例 言

- 1 本書は、京都市南区久世東土川町17-1他6筆で実施した、長岡京跡左京一条三坊十・十一町の発掘調査報告書である。(京都市番号 18NG053)
- 2 調査は、株式会社片岡製作所(代表取締役社長 片岡宏二 以下、「片岡製作所」という)の新工場建設に伴い、長岡京跡左京第604次調査(7ANVMK-6地区)として実施した。
- 3 現地調査は、片岡製作所より株式会社文化財サービス(以下、「文化財サービス」という)に委託され実施した。調査は、辻 純一(文化財サービス)の指導のもと、大西晃靖(文化財サービス)が担当した。
- 4 調査期間は、平成30年6月6日～7月11日である。
- 5 調査面積は、460㎡である。
- 6 本文・図中の方位・座標は世界測地系による。標高は、T.P.(東京湾平均海面高度)である。
- 7 土層名及び出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
- 8 本書の執筆は、辻の指導のもと大西が行った。編集は、大西、野地ますみ(文化財サービス)が行った。
- 9 遺跡の写真撮影は大西が行い、出土遺物の撮影は西 綾香(文化財サービス)が行った。
- 10 調査に係る資料は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。
- 11 発掘調査及び整理作業の参加者は、下記の通りである。

〔発掘調査〕 大西晃靖、辻 純一、望月麻佑、田中慎一、上田智也、吉岡創平、広瀬八郎  
(以上、文化財サービス)、作業員(株式会社京カンリ)

〔整理作業〕 大西晃靖、辻 純一、古谷真由美、野地ますみ、辰巳陽一、望月麻佑、米倉美穂、多賀摩耶、上野恵己、内牧明彦、西尾知子、西 綾香、本間愛子、溝川珠樹、森 尚子、若山美帆(以上、文化財サービス)
- 12 調査期間中は、片岡製作所に全面的なご協力をいただいた。
- 13 現地調査・整理作業において、下記の方にご教示をいただいた。記して感謝いたします。  
(敬称略)

國下多美樹(龍谷大学)、浜中邦弘(同志社大学)



# 目次

第Ⅰ章 調査の経緯	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	1
3 整理作業・報告書作成	4
第Ⅱ章 位置と環境	5
1 位置と環境	5
2 周辺の遺跡と既往調査	5
第Ⅲ章 調査成果	9
1 基本層序	9
2 検出遺構	9
(1) 江戸時代以降	9
(2) 鎌倉・室町時代	13
(3) 弥生時代	13
3 出土遺物	20
(1) 弥生土器	20
(2) 平安時代以降の土器	25
(3) 瓦	25
(4) 石製品	25
第Ⅳ章 まとめ	27

# 図版目次

図版1	遺構	1. 調査前（南東から）	2. 調査区全景（北から）
図版2	遺構	1. 溝79、80（南東から）	2. 調査区南部鎌倉時代柱穴群（東から）
		3. 柱穴86断面（北から）	
図版3	遺構	1. 土坑82、83、84（北東から）	2. 土坑82断面（南西から）
		3. 土坑83断面（南西から）	4. 土坑84断面（南東から）
図版4	遺構	1. 方形周溝墓1（南から）	2. 溝93断面（西から）
		3. 溝96断面（南から）	
図版5	遺構	1. 溝93遺物出土状況1（北東から）	2. 溝93遺物出土状況2（北西から）
		3. 溝96遺物出土状況（南東から）	

- 図版6 遺構 1. 方形周溝墓2 (南から) 2. 溝95断面 (東から)  
3. 溝95遺物出土状況1 (南から)
- 図版7 遺構 1. 溝95遺物出土状況2 (西から) 2. 溝111 (南から)  
3. 溝111断面 (西から)
- 図版8 遺構 1. 土坑92検出状況 (南から) 2. 土坑92 (北西から)  
3. 土坑92、溝93断面 (西から)
- 図版9 遺物 出土遺物-1 (弥生土器)
- 図版10 遺物 出土遺物-2 (弥生土器・石製品)
- 図版11 遺物 1. 出土遺物-3 (弥生土器) 2. 出土遺物-4 (平安・鎌倉時代)

## 挿 図 目 次

図1	調査位置図 (1:2,500).....	1
図2	調査区地区割図 (1:400) .....	2
図3	調査過程 .....	3
図4	調査地周辺の遺跡と既往調査 (1:5,000) .....	6
図5	調査区北・東壁土層断面図 (1:80) .....	10
図6	調査区平面図 (1:150) .....	11
図7	鎌倉・室町時代 平面・断面図 (1:40) .....	12
図8	方形周溝墓1 平面図 (1:80) .....	14
図9	方形周溝墓1 周溝断面図 (1:40) 遺物出土状況図 (1:20) .....	15
図10	方形周溝墓2 平面図 (1:80) .....	16
図11	方形周溝墓2 周溝断面図 (1:40) 遺物出土状況図 (1:20) .....	17
図12	方形周溝墓 断割断面図 (1:80) .....	18
図13	土坑92 平面・断面図 (1:40) .....	18
図14	出土遺物1 (弥生土器1:4) .....	22
図15	出土遺物2 (弥生土器1:4) .....	23
図16	出土遺物3 (平安・鎌倉時代、瓦1:4) .....	24
図17	出土遺物 (瓦) .....	24
図18	出土遺物4 (石製品1:2) .....	26

## 表 目 次

表1	遺構概要表.....	9
表2	遺物概要表.....	20
表3	遺物観察表 .....	29

# 第I章 調査の経緯

## 1 調査に至る経緯

京都市南区久世東土川町に、株式会社片岡製作所（以下、「片岡製作所」という）の新工場建設が計画された。建設予定地は、長岡京左京一条三坊十・十一町、一条条間大路に当たり、また周辺には縄文～古墳時代及び中世集落跡である東土川遺跡、弥生時代後期～古墳時代の集落跡である宮ノ脇遺跡、中世の集落跡である戌亥遺跡等が分布し埋蔵文化財の包蔵が予想された。そのため、建築工事に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）により試掘調査が実施されることとなった。

試掘調査は、建物建設予定地の4箇所に調査区を設定して実施された。その結果、主に予定地の南側で弥生時代～中世の遺構が確認されたことから、予定地の南端に東西21m、南北20mの調査区を設定し発掘調査が実施されることとなった。発掘調査は、片岡製作所から株式会社文化財サービス（以下、「文化財サービス」という）に委託された。

## 2 調査の経過

発掘調査は、6月6日より近隣の方に調査の周知を行った後、6月7日に調査区の設定を行い、6月8日から重機により現代盛土の掘削を行った。試掘調査の結果から、当地は現代盛土直下で弥生時代～中世の遺構が検出されていることから、現代盛土の掘削後は、人力により攪乱の掘り下げ及び遺構検出を行った。その結果、地山上面で弥生時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代、近現代の遺構を検出した。検出した遺構は、中世以前と中世以降とに分け、後者より人力による

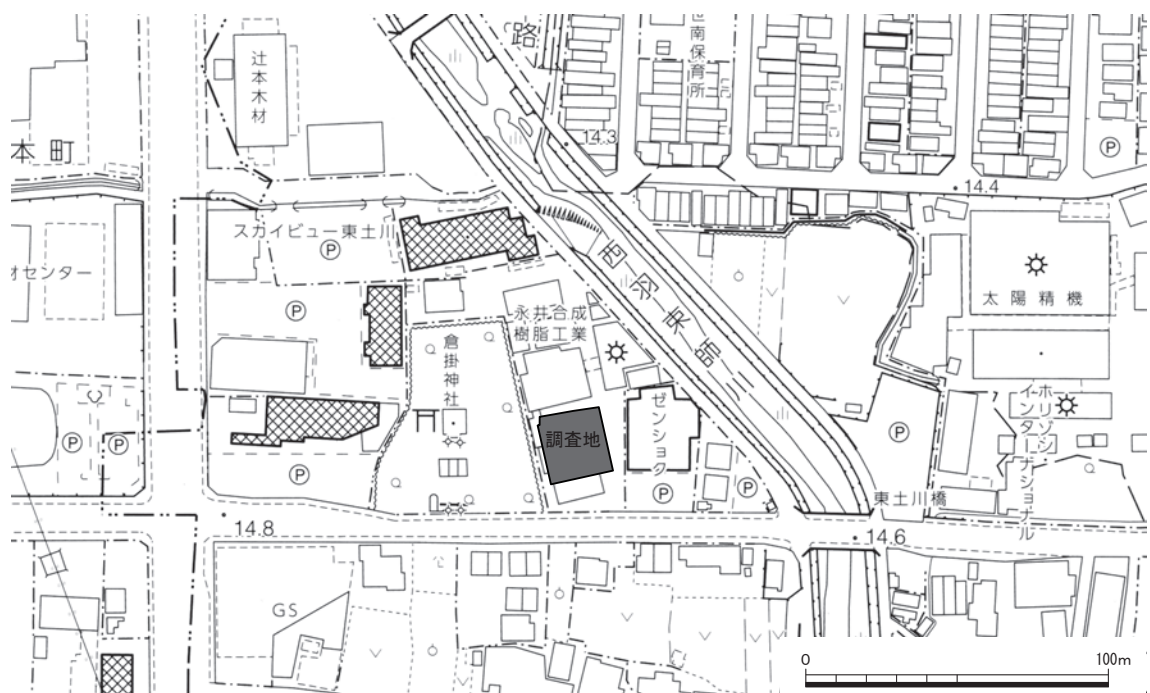


図1 調査位置図 (1:2,500)

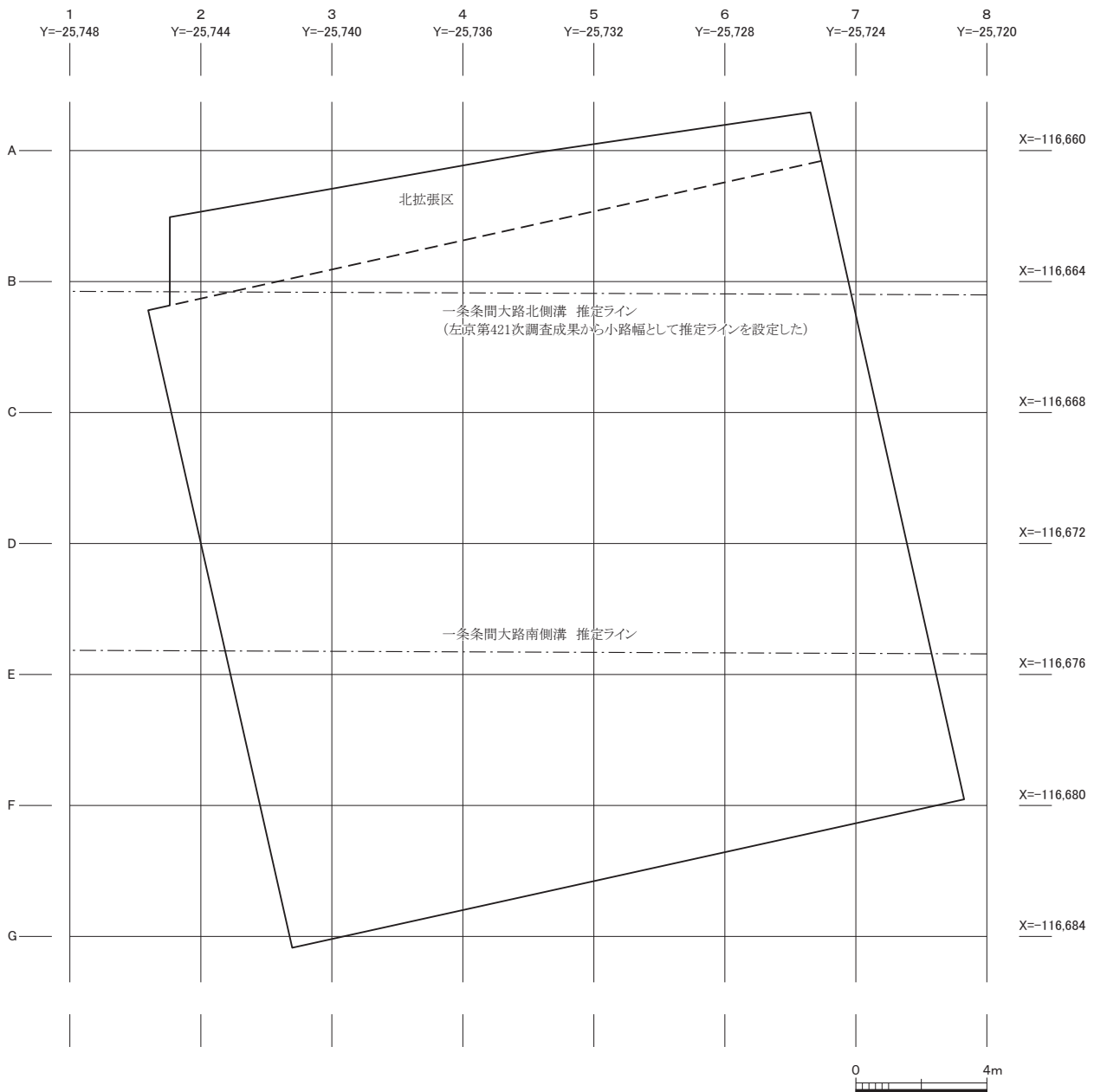


図2 調査区地区割図 (1 : 400)

掘り下げを行った。調査を進める中で、適宜写真撮影及び図面作成による遺構の記録作業を行った。調査区の北半で弥生時代の方形周溝墓を2基検出したことから、遺構の規模や分布状況を確認するため、調査区を北に約2m拡張して調査を行った。その結果、方形周溝墓の北辺溝とみられる溝状遺構を検出し、写真撮影及び図面作成を行った。図面作成は、トータルステーションによる取り込み、手測りによる実測、写真測量を併用した。遺構の掘り下げや記録作業が終了した後、7月11日に調査区の埋め戻しを行い、現地調査を終了した。

現地調査においては、調査の進展に伴い文化財保護課の指導を適宜受けた。また、龍谷大学教授國下多美樹氏、同志社大学准教授浜中邦弘氏には、外部検証委員として遺構検出段階及び掘り





1 重機掘削（南から）



2 遺構検出状況（南東から）



3 近世溝調査状況（東から）



4 土坑92調査状況（南から）



5 溝93調査状況（北西から）



6 遺構実測（北東から）



7 北拡張区重機掘削（東から）



8 北拡張区の状況（東から）

図3 調査過程

下げ段階において現地で検証いただき、調査に対する適切な助言をいただいた。

#### 測量基準点の設置と地区割

測量基準点は、VRS測量により調査地内にT.1、T.3の2点を設置し、その2点からトータルステーションによりT.2を設置した。基準点測量の成果は、以下のとおりである。

T.1      X = -116,689.672 m      Y = -25,726.695 m      H = 14.208 m

T.2      X = -116,658.353 m      Y = -25,724.512 m      H = 14.646 m

T.3      X = -116,638.596 m      Y = -25,724.839 m      H = 14.396 m

検出した遺構の管理や遺物取上の単位とするため、調査区に世界測地系に基づき4m四方のグリッドを設定した。Y軸にアラビア数字を西から東に、X軸にアルファベットを北から南に順に付し、数字とアルファベットの組み合わせで地区名を設定した。地区名は、4mグリッドの北西交点で設定した。

### 3 整理作業・報告書作成

現地調査終了後、整理作業及び報告書作成を行った。整理作業は、写真・図面の整理と出土遺物の整理を並行して行った。遺物の整理は、洗浄、接合、実測、トレース、復元、写真撮影を行った後、報告書の執筆及び編集作業を行い、報告書を作成した。執筆は調査を担当した大西晃靖、編集作業は野地ますみが担当し、その他整理業務は当社社員が分担して行った。

## 第Ⅱ章 位置と環境

### 1 位置と環境

調査地は桂川の形成した氾濫原に位置する。桂川右岸より約 1.4km 西側の地点であり、標高は約 14.2 m である。調査地周辺は、桂川と西山山地及び向日丘陵間に広がる低地が形成され、長岡京の条坊復原では、調査地は左京一条三坊十・十一町に相当し、長岡京廃都後は乙訓郡の条里に取り込まれる。

乙訓地域は、東を桂川が流れ、山崎で三川が合流し淀川となって大阪方面に流下するという古くから水運の発達した地域である。調査地の東を湾曲しながら北西から南東方向に流れる西羽東師川は、中世以降に当地域を含む洛西地域の基幹灌漑用水であった「今井用水」を前身としている。周辺には、縄文時代から近世にかけての遺跡が分布しており、当地域での連綿と続く生活の痕跡を窺うことができる。

### 2 周辺の遺跡と既往調査

調査地周辺は、長岡京左京域の他に、東土川遺跡、宮ノ脇遺跡、高田遺跡、戌亥遺跡等、縄文時代～中世にかけての遺跡が分布する。以下に、周辺の既往調査の成果を時代毎に記述する。

**弥生～古墳時代** 調査地の周辺では、東土川遺跡、宮ノ脇遺跡等が分布する。

東土川遺跡は、西羽東師川改修に伴う左京第 418 次調査<sup>(1)</sup>や名神高速道路桂川サービスエリア建設に伴う左京第 304 次・331 次・333 次・334 次・336 次・337 次・361～363 次・384 次・385 次・399 次調査<sup>(2)</sup>等が実施されている。左京第 418 次調査では、方形周溝墓の周溝の一部が検出されている。また、弥生時代中期前半の壺棺を埋納した土壙墓が検出されている。桂川サービスエリア建設に伴い実施された一連の調査では、弥生時代中期の方形周溝墓や小区画の水田が検出された。古墳時代では、流路や溝を中心とした遺構が検出されている。調査地の約 100 m 東で実施された西羽東師川の河川改修に伴う第 9 次調査<sup>(3)</sup>では、弥生時代中期の遺物を含む 2 条の溝が検出されている。古墳時代では、調査区内で北東から南に湾曲する河川跡が検出され、その東岸部にはしがらみ状の灌漑用の堰と推定される遺構が確認された。東土川遺跡の範囲からは西に外れるが、左京第 421 次調査<sup>(4)</sup>では弥生時代中期の流路、畝、方形周溝墓が検出されている。

調査地の北に位置する宮ノ脇遺跡では、左京第 36 次<sup>(5)</sup>・203 次<sup>(6)</sup>・347 次調査<sup>(7)</sup>等が実施されている。左京第 36 次調査では、弥生時代後期～庄内並行期の土器・木製品・種子を含む流路が検出され宮ノ脇遺跡の存在が周知されることとなった。左京第 203 次調査では、弥生～古墳時代の土器類を多く含む複数の流路や古墳時代の住居跡が複数検出されている。

**長岡京期** 調査地は、長岡京左京一条三坊十・十一町、一条条間大路に相当する。調査地の約 200 m 西で実施された左京第 421 次調査<sup>(4)</sup>では、一条条間大路、東三坊坊間西小路及び掘立柱建物跡が検出された。一条条間大路に関しては、9 m の小路幅であることが確認された。調査地より約 250 m 北の北一条大路推定位置では、左京第 48 次<sup>(8)</sup>・146 次<sup>(9)</sup>・173 次<sup>(10)</sup>・179 次<sup>(11)</sup>・533 次調



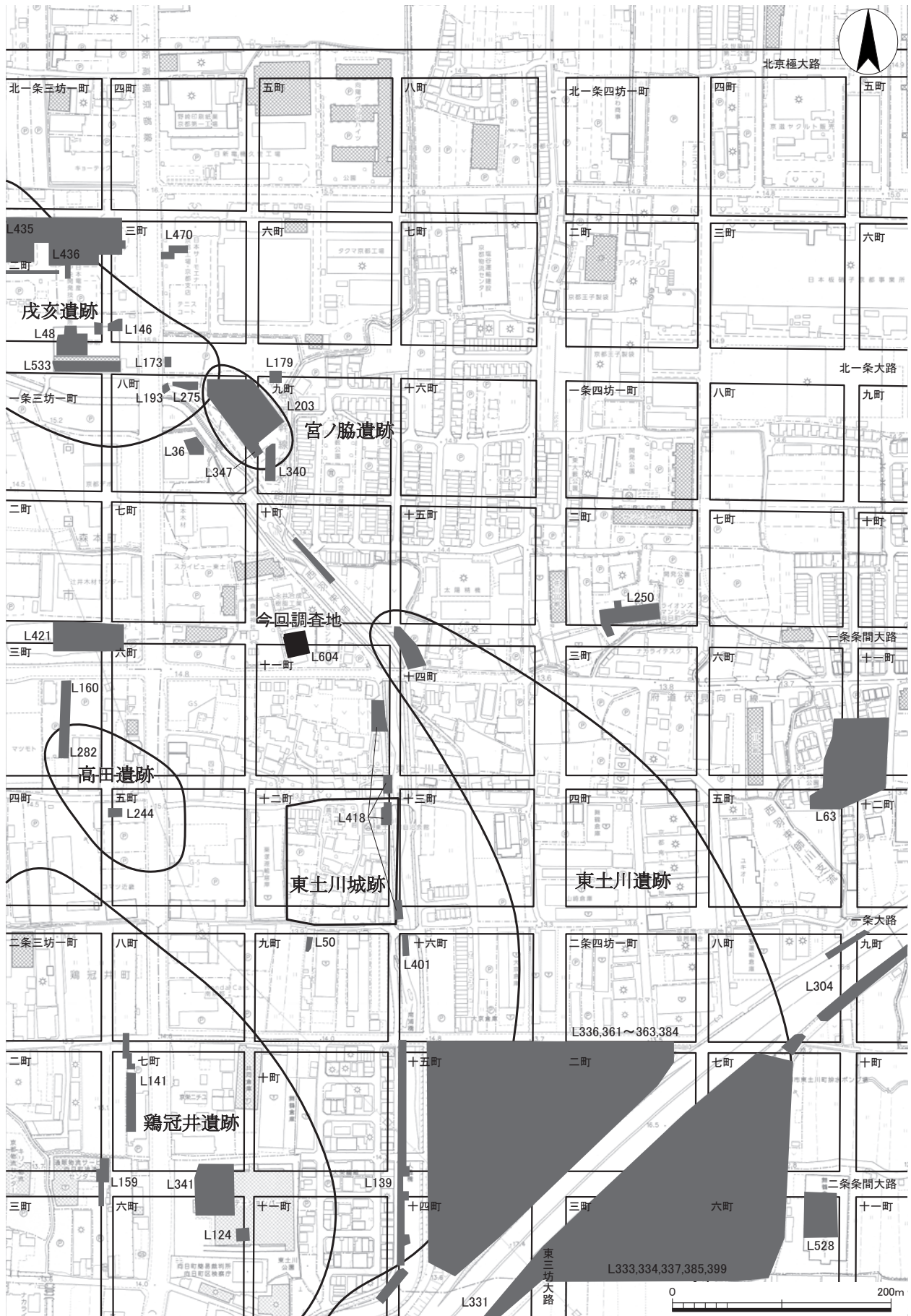


図4 調査地周辺の遺跡と既往調査 (1 : 5,000)

査<sup>(12)</sup>が実施され、第146次調査において長岡京期の瓦が多く投棄された北一条大路の北側溝と推定される東西溝が検出されている。

調査地の約400m北東には、平安京遷都直前に桓武天皇の仮内裏となった東院跡が位置する。左京第435次・436次調査<sup>(13)</sup>において大規模建物群が検出され、「東院」銘の墨書土器や多数の木簡が出土している。左京第203次調査<sup>(6)</sup>では、掘立柱建物、柵列、流路が検出された。流路からは土器、瓦類とともに木簡や削屑を中心とした多数の木製品が出土し、その内容から運搬されてきた木材を陸揚げし、木材の加工や資材の集積、宮・京内の造営現場への資材の運搬をした津に関係する遺跡であると想定されている。また、東院造営との関係も注目される。左京第36次・274次調査<sup>(14)</sup>においても、掘立柱建物跡が検出されている。左京第418次調査<sup>(1)</sup>では、東三坊坊間小路の東西側溝が検出され、側溝間は9.5mであることが確認されている。桂川サービスエリア建設に伴う一連の調査<sup>(2)</sup>では、二条三坊十五町において一町規模の邸宅や東三坊大路、二条条間大路等の道路遺構が検出されている。

**鎌倉～室町時代** 調査地周辺では、戌亥遺跡や東土川遺跡で中世の集落が確認されている。

戌亥遺跡は、左京第48次調査<sup>(8)</sup>で13世紀後半から14世紀前半の柱穴群、井戸、土坑が密集して検出されたことで遺跡の存在が周知された。左京第146次調査<sup>(9)</sup>では、第48次調査の南に隣接する調査区で、同時期の柱穴群、溝、土坑が検出された。左京第48次・146次調査の北側で実施された左京第435次調査<sup>(13)</sup>、南側で実施された左京第533次調査<sup>(12)</sup>でも、同時期の掘立柱建物、柱穴群、井戸、土坑が検出されている。左京第173次調査<sup>(10)</sup>では、柱穴群、掘立柱建物が検出された。左京第203次調査<sup>(6)</sup>でも、少数の遺構が検出されているが、遺跡の中心は国道171号線周辺とその西側と想定される。

東土川遺跡では、左京第418次調査<sup>(1)</sup>で室町～江戸時代初期の集落跡が確認された。主に戦国～江戸時代初期の遺構が多く、掘立柱建物、柱穴群、溝、井戸、流路等が検出されている。現在の西羽東師川に並行して南北に流れる戦国時代の流路跡は、江戸時代初期に埋められており、この時期に村を拡張したことが推定されている。また、東土川町内に戦国時代の東土川城の存在も想定されている。

#### 文献注

- (1) 百瀬正恒・鎌田泰知・上村憲章「第1章 発掘調査 VI 長岡京跡 17～19 長岡京左京一条三坊1～4」『平成10年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2000年
- (2) 野島 永・中川和哉・小池 寛・岩松 保・平良泰久『長岡京跡左京二条三・四坊 東土川遺跡』京都市遺跡調査報告書 第28冊 公益財団法人京都市埋蔵文化財調査研究センター 2000年
- (3) 吉崎 伸「第1章 VI 長岡京跡 36 長岡京左京一条三坊・東土川遺跡」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- (4) 中塚 良・山口 均「5 長岡京跡左京第421次(7 AND TD-3地区)～一条条間大路・東三坊坊間西小路交差点、一条条間大路・東二坊大路交差点、左京一条三坊二・三・六・七町～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第57集 財団法人向日市埋蔵文化財センター 2003年

- (5) 國下多美樹・田中元浩「長岡京左京第 36 次 (7 AND I I 地区) ～左京一条三坊八町、東土川遺跡～発掘調査報告」『長岡京跡発掘調査研究所調査報告書』長岡京跡発掘調査研究所・財団法人向日市埋蔵文化財センター 2003 年
- (6) 百瀬正恒「第 1 章 VI 長岡京跡 37 長岡京左京一条三坊・戌亥遺跡」『昭和 63 年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1993 年
- (7) 永田宗秀「第 1 章 V 長岡京跡 15 長岡京跡左京一条三坊・東土川遺跡」『平成 6 年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996 年
- (8) 國下多美樹「長岡京跡左京第 48 次 (7 AND I I - 2 地区) ～左京北一条三坊二町、戌亥遺跡～発掘調査報告」『長岡京跡発掘調査研究所調査報告書』長岡京跡発掘調査研究所・財団法人向日市埋蔵文化財センター 2003 年
- (9) 渡辺 博「長岡京跡左京第 146 次 (7 AND I I - 4 地区)」『長岡京連絡協議会資料』No.85 - 12・No.86 - 01・No.86 - 002 1985・1986 年
- (10) 國下多美樹「長岡京跡左京第 173・193 次 (7 AND I I - 5・6 地区) ～左京一条三坊六町、戌亥遺跡～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 27 集 財団法人向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会 1989 年
- (11) 長宗繁一・百瀬正恒「第 1 章 VI 長岡京跡 37 長岡京左京一条三坊 1」『昭和 62 年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991 年
- (12) 松崎俊郎「長岡京跡左京第 533 次 (7 AND I I - 8 地区) ～左京北一条三坊一町、東土川西遺跡、戌亥遺跡～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 93 集 財団法人向日市埋蔵文化財センター 2012 年
- (13) 梅本康弘・國下多美樹・中塚 良・松崎俊郎・佐藤直子「長岡京跡左京北一条三坊二町」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 55 集 財団法人向日市埋蔵文化財センター 2002 年
- (14) 長宗繁一「第 1 章 VI 長岡京跡 15 長岡京左京一条三坊」『平成 3 年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995 年

## 第Ⅲ章 調査成果

### 1 基本層序（図5）

本調査地は西下がり、緩やかに傾斜し、標高は調査地の東で約 14.4 m、西で約 14.0 m である。調査区全体には、調査前まで存在していた工場の建設に伴う現代盛土が 0.3 ～ 1.0 m の厚さで堆積している。

調査区の大部分では、盛土直下で褐色系粘土の地山を検出した。調査区北東部では、地山の上位に近現代及び近世の耕作土層を検出した。共に層厚 0.2 m 前後で、近現代の耕作土は黒褐色粘質シルト、近世の耕作土層はオリーブ褐色粘質シルトである。

### 2 検出遺構

今回の調査では、地山上面で弥生時代～近現代の遺構を検出した。工場建設及び解体に伴う攪乱が調査区の広範囲に及んでいる。遺構の時期は、弥生時代、鎌倉～室町時代、江戸時代以降の 3 時期に区分される。以下に、各時期の遺構について記述する。

表1 遺構概要表

時代	遺構	備考
弥生時代	方形周溝墓 1・2、土坑 92	
鎌倉～室町時代	掘立柱建物、柵、柱穴、土坑 82・83・84	
江戸時代以降	ピット、耕作溝、導水路、土坑 50	

#### (1) 江戸時代以降

江戸時代以降の遺構は、ピット、溝、土坑等を検出した。いずれも耕作に関連する遺構と考えられる。

#### [ピット]

主に調査区の北部で検出した。直径 0.3 m 前後の円形を呈する。建物や柵等としてのまとまりは確認できなかった。

#### [溝]

調査区全域で江戸時代～現代の耕作溝を検出した。調査区の南北で溝の軸線が異なり、南半部ではほぼ正方位にのるが、北半部では調査地の東を流れる西羽東師川と直交する北東～南西方向の軸線である。土地の区割を示すものであろう。近世と近現代の耕作溝の切合いが確認できるが、溝の軸線はほぼ同じであることから、土地の区割は現代まで踏襲しているものと考えられる。

耕作溝の埋土は、近世が灰黄褐色砂質シルト、近現代は暗灰黄色粘質土である。調査区北東部で検出した溝 79・80 は、底面に板を敷いた導水路である。溝 80 は軸線が周囲の耕作溝と同方向であり、溝 79 は直行して溝 80 と接続する。溝の軸線方向や、埋土が灰黄褐色系砂質シルトであ



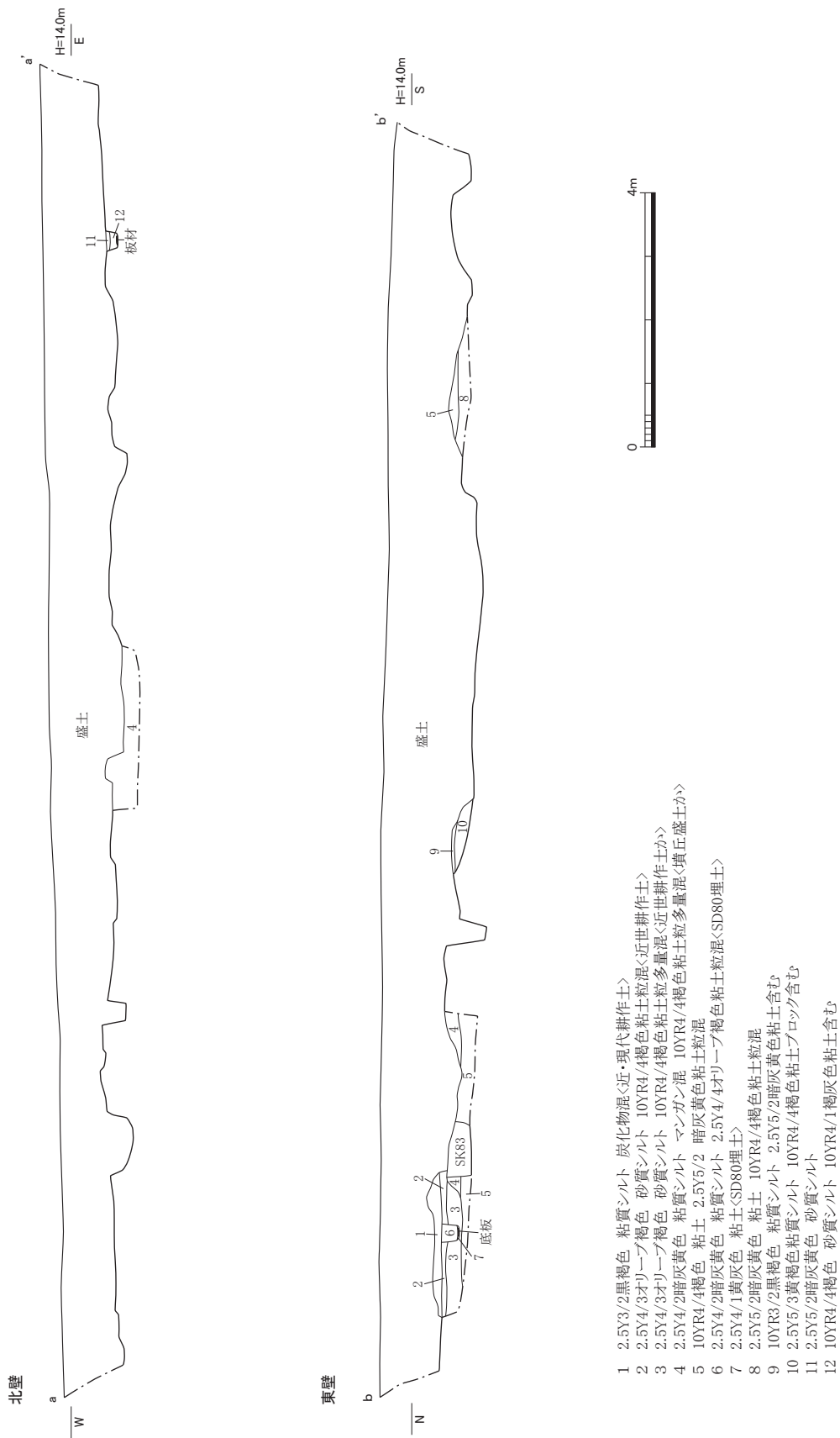


図5 調査区北・東壁土層断面図 (1:80)





図6 調査区平面図 (1:150)

ることから、耕作に関する導水路であると考えられる。

〔土坑〕

土坑 50 2D・3D区で検出した土坑である。平面形は方形土坑を2基重ねたような不整形を呈する。底面は平坦で断面箱型を呈する。深さは検出面から0.45mである。耕作に伴う水溜等が考えられるが詳細は不明である。埋土は褐色粘土ブロック、マンガ、炭化物を含む暗灰黄色砂質シルトである。染付、陶器等近世後半の遺物が出土した。

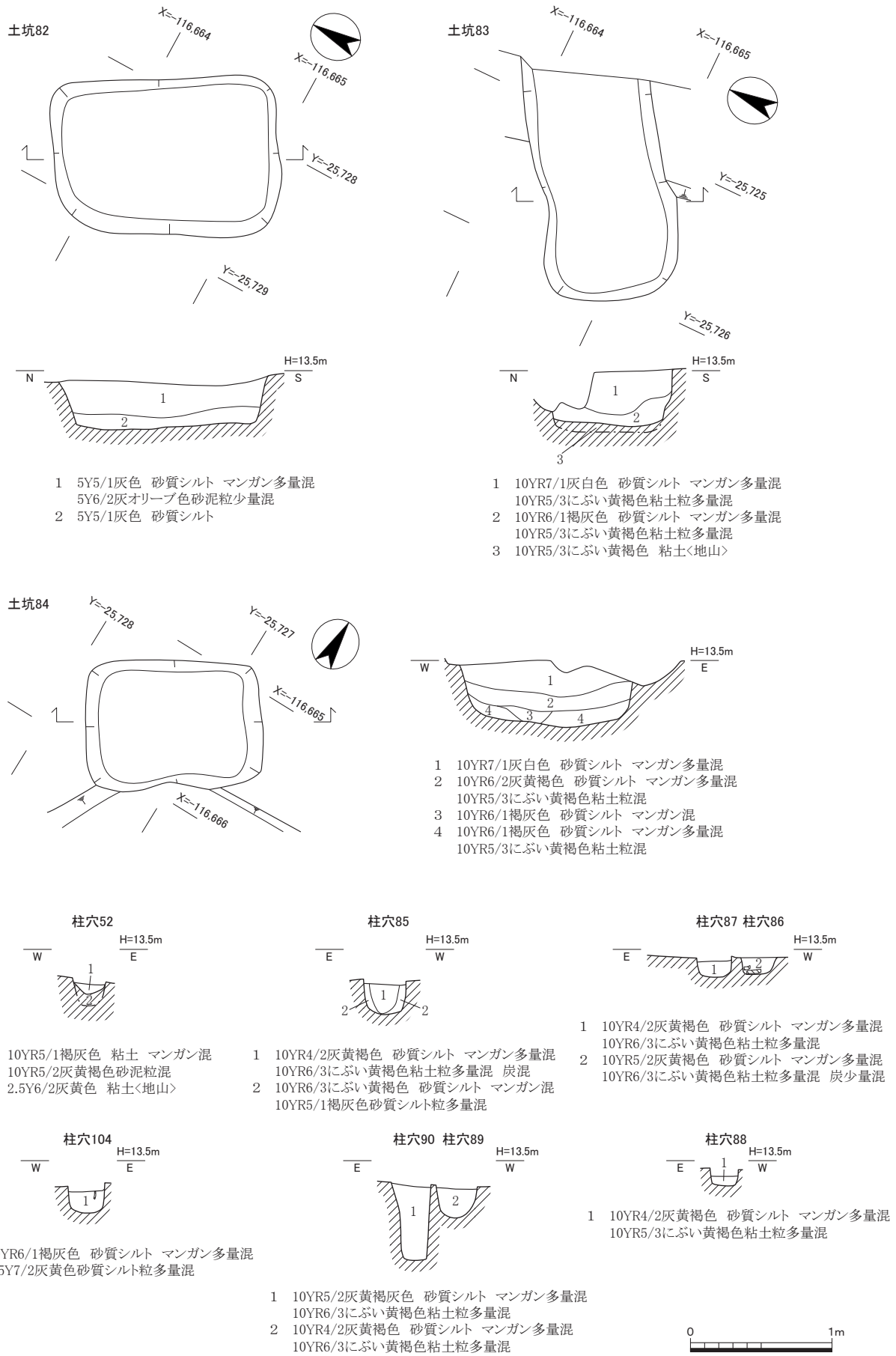


図7 鎌倉・室町時代 平面・断面図 (1:40)

## (2) 鎌倉・室町時代

鎌倉・室町時代の遺構は、柱穴、土坑を検出した。

## 〔建物・柱穴〕

主に調査区の南半で柱穴群を検出した。大半が直径0.3～0.4 mを測る。柱穴の埋土は灰黄褐色系、褐灰色系、黒灰色系粘質シルトに分かれる。

調査区南壁付近5 F区で検出した柱穴群は、灰黄褐色砂質シルトが埋土で、鎌倉時代の土師器、瓦器などが出土した。柱穴86には、根石代わりとして平安時代の平瓦が据えられていた。柱穴85と86の柱間は2.4 m、柱穴85と87の柱間は2.7 mを測る。東西及び北側に対応する柱穴を検出していないことから、調査区外南に延びる建物が想定される。

調査区西半のDライン沿いに、東西方向に並ぶ柱穴102・52・104を検出した。柱穴52・104間に柱穴が検出できていないが、柱間2 m前後を測る柵の可能性はある。軸線が東西軸より南西～北東方向に約7°振る。各柱穴の埋土は、褐灰色砂質シルトである。柱穴104から瓦器椀が出土した。調査区南部の柱穴群から出土した瓦器と同時期の12世紀末頃に属する。

## 〔土坑〕

調査区北東部で3基の土坑を検出した。

**土坑 82 (図7)** 5 A・6 A・6 B区で検出した土坑である。長辺1.58 m、短辺1.09 mの南北に長い長方形の平面形を呈する。土坑の長辺は、北西から南東方向に振る。検出面からの深さは0.34 mである。底面は平坦で、箱型の断面形を呈する。埋土はマンガンを多く含む灰色砂質シルト、砂質シルトである。

**土坑 83 (図7)** 6 A・6 B区で検出した土坑である。長辺1.68 m、短辺0.91 mの東西に長い長方形の平面形を呈する。土坑の長辺は、北東から南西方向に振る。検出面からの深さは0.38 mである。底面は平坦で、箱型の断面形を呈する。埋土は灰白色砂質シルト、褐灰色砂質シルトである。埋土はマンガンを多く含む。遺物は小片であるが、瓦器、瀬戸等が出土した。

**土坑 84 (図7)** 6 B区で検出した土坑である。長辺1.25 m、短辺0.92 mの東西に長い長方形の平面形を呈する。土坑の長辺は、北東から南西方向に振る。検出面からの深さは0.45 mである。底面は平坦で、箱型の断面形を呈する。埋土は灰白色砂質シルト、灰黄褐色砂質シルト、褐灰色砂質シルトである。埋土はマンガンを多く含む。

土坑82～84は、軸線の振れや埋土が類似することから、同時期の遺構と考える。出土遺物は細片であるが、近世の遺物は出土していないこと、土坑83から瀬戸の細片が出土していることから、室町時代の土坑と判断した。形状から土壙墓の可能性を考える。しかしながら、調査区北半で検出した近世の耕作溝や水路と軸線が同じであることから、近世以降の耕作に伴う水溜等の可能性も考えられる。

## (3) 弥生時代

弥生時代の遺構は、方形周溝墓2基、土坑1基を検出した。

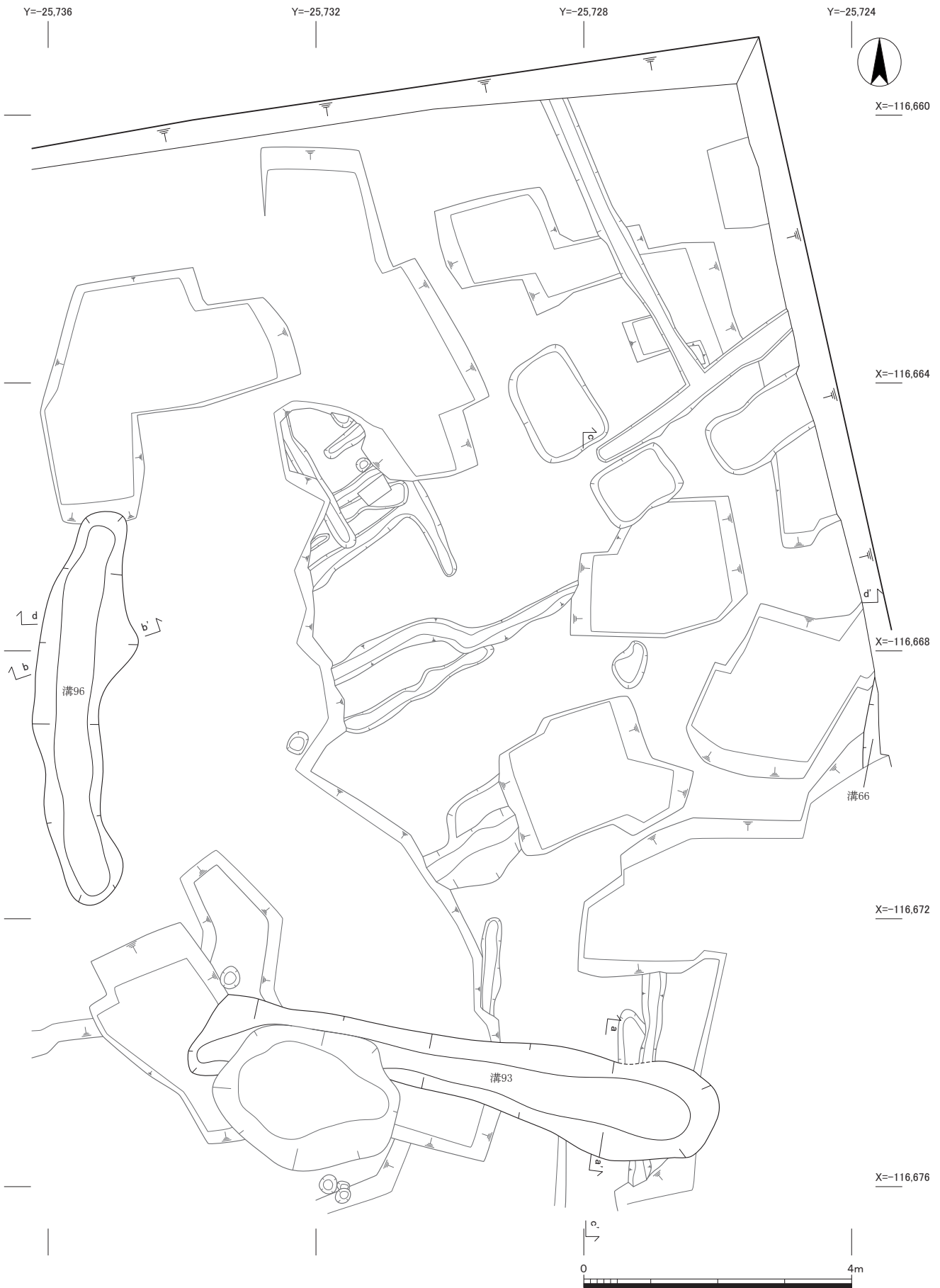


図8 方形周溝墓1 平面図 (1 : 80)

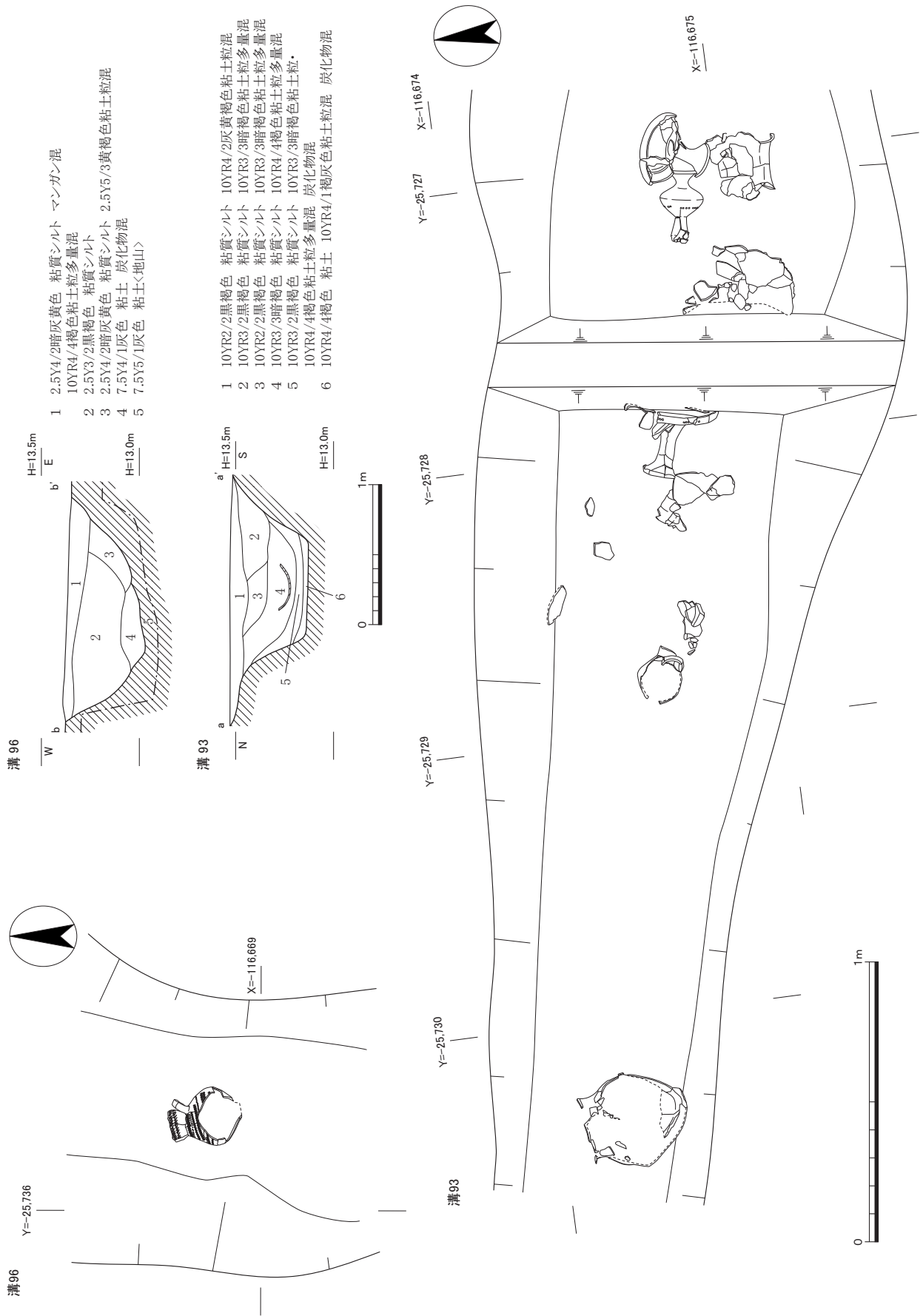


図9 方形周溝墓1 周溝断面図(1:40) 遺物出土状況図(1:20)

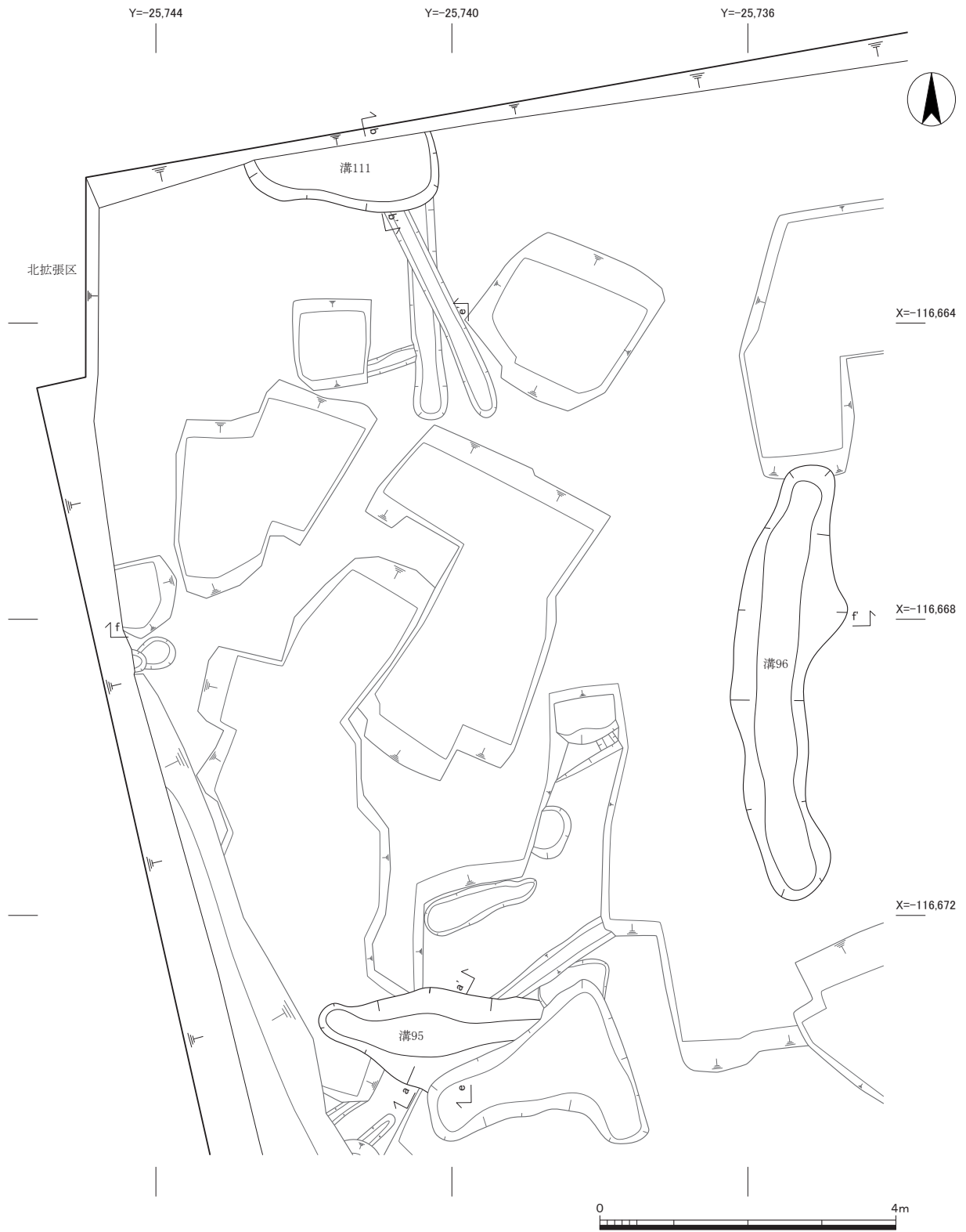


図10 方形周溝墓2 平面図 (1 : 80)

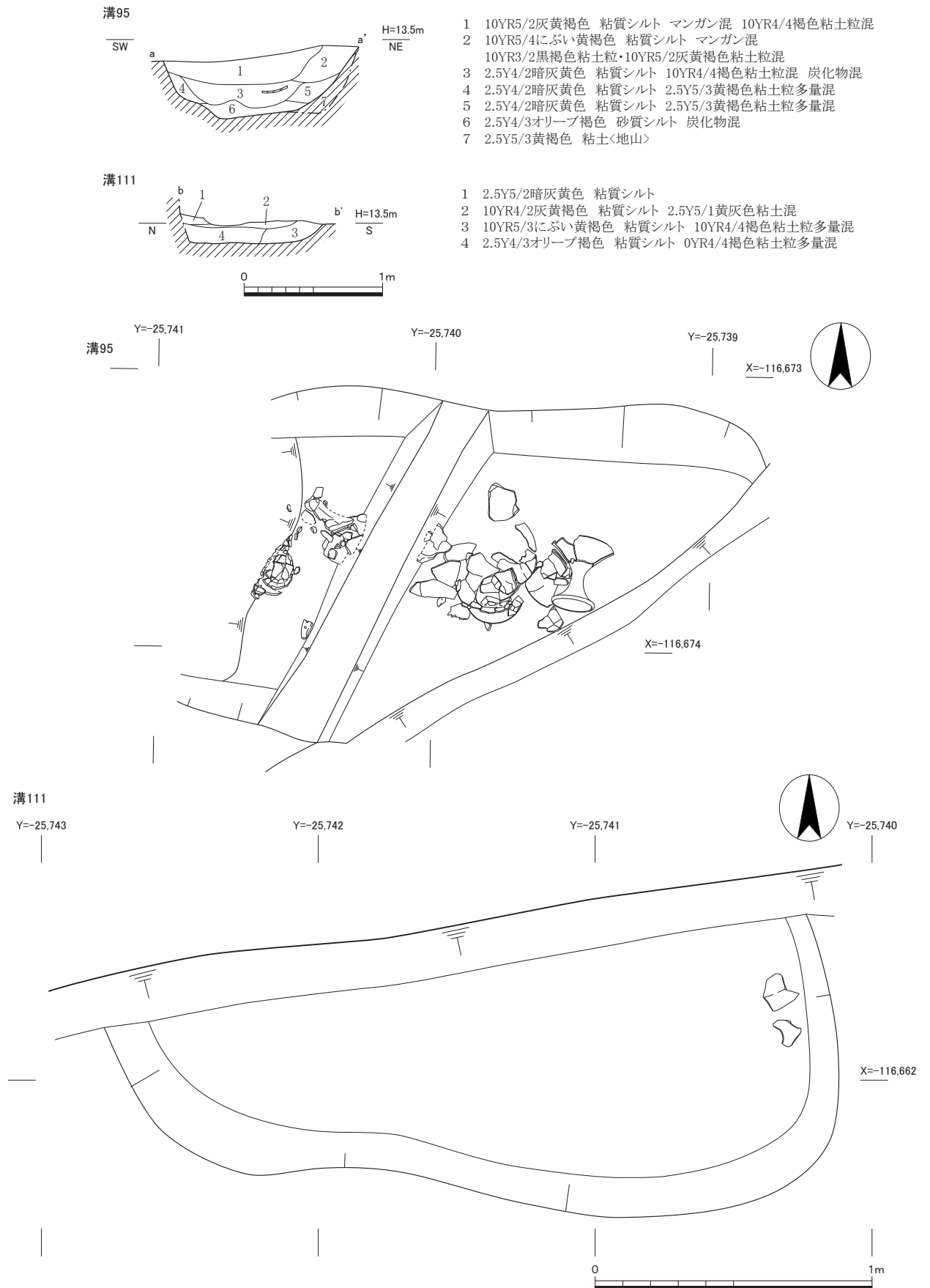


図11 方形周溝墓2 周溝断面図(1:40) 遺物出土状況図(1:20)

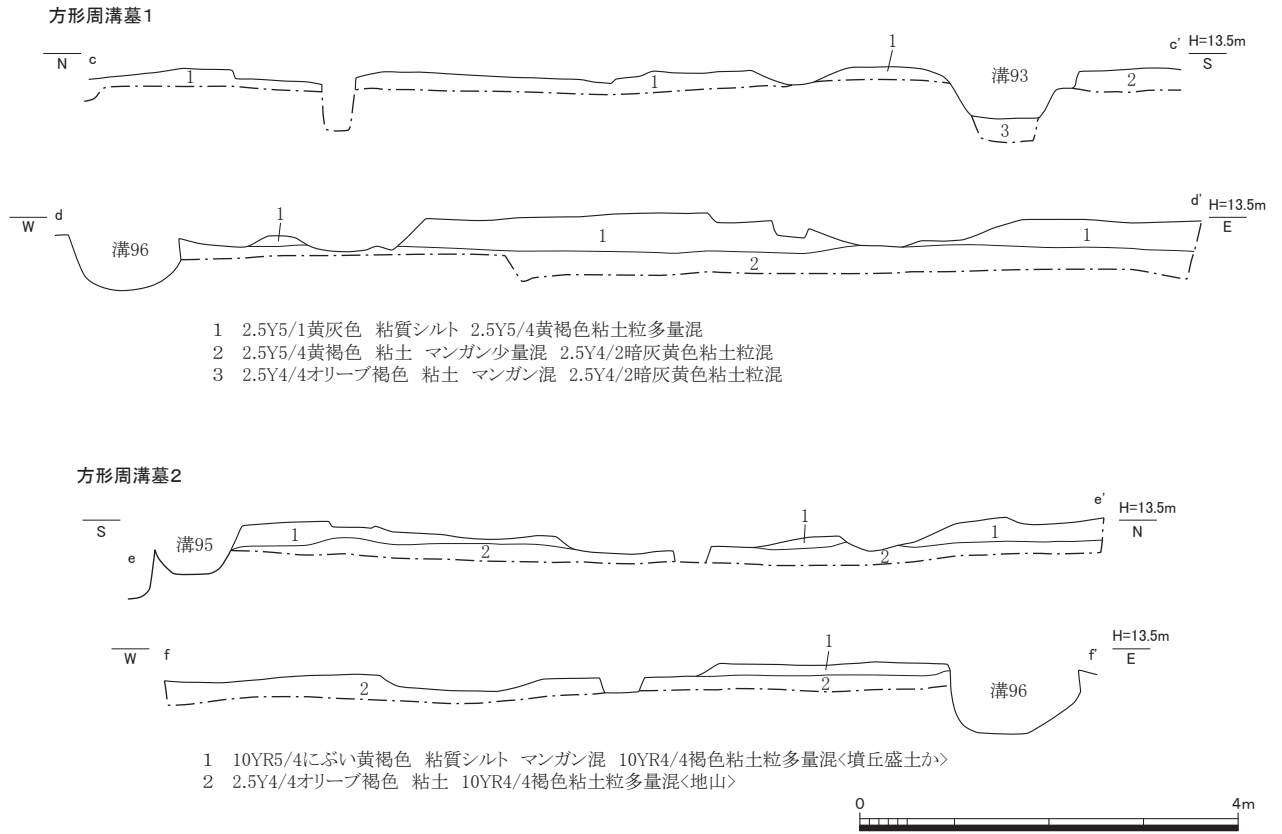


図12 方形周溝墓 断剖面図 (1:80)

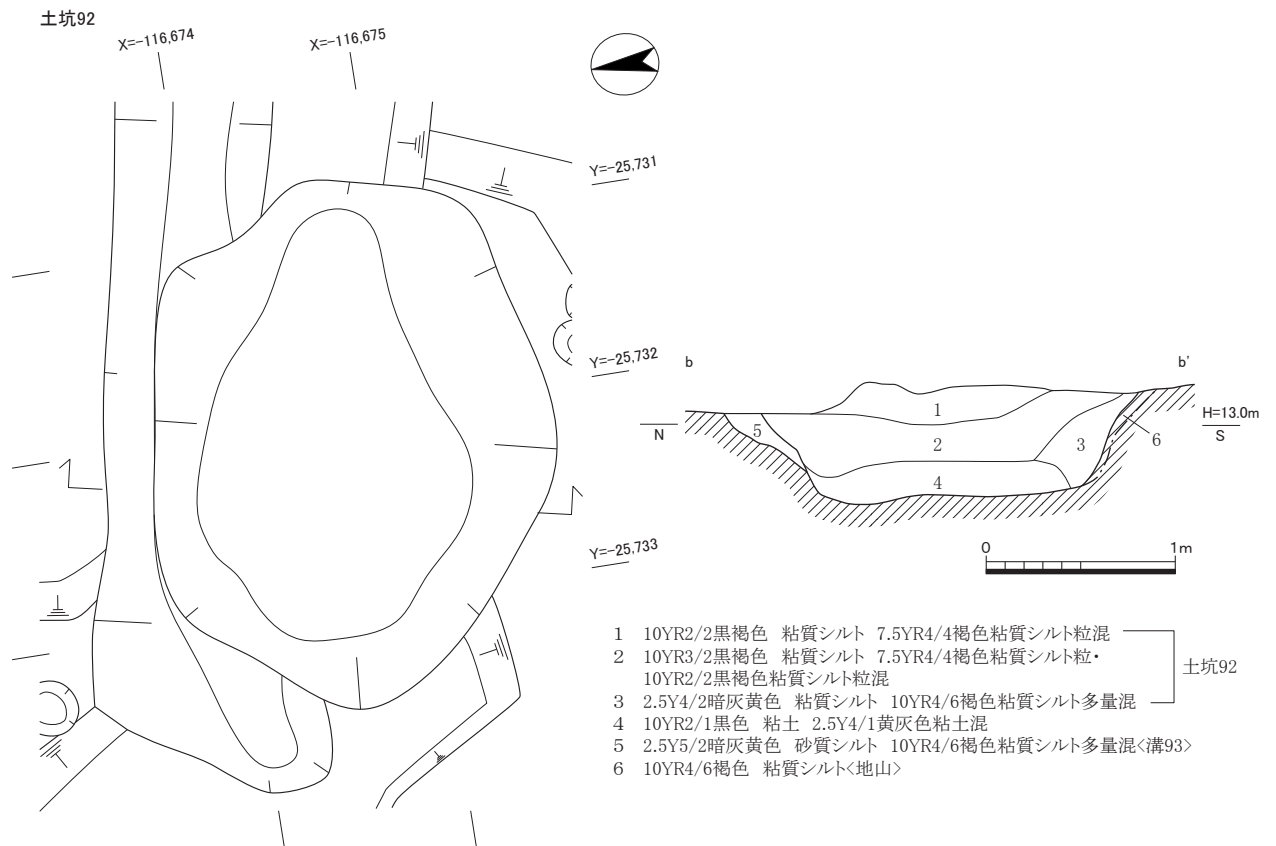


図13 土坑92 平面・断面図 (1:40)



## 〔方形周溝墓〕

方形周溝墓は、調査区の北半部で2基検出した。南北方向の周溝を共有し、東西に並んだ状態で検出した。東側を方形周溝墓1、西側を方形周溝墓2とした。

**方形周溝墓1 (図8・9・12)** 溝96を西辺溝、溝93を南辺溝、溝66を東辺溝とする推定規模13m前後の方形周溝墓である。東辺溝66は西側の肩口のみを検出であり、北辺溝は検出していない。周溝墓の角部では、周溝が繋がらず途切れている。

東辺溝96、南辺溝93は0.5m前後の深さを測り、南辺溝93は断面台形を呈する。主体部や墳丘盛土は検出していない。南辺溝93の東半部及び西辺溝96中央部からIV-1様式に属する高杯・壺・甕・水差等が出土した。南辺溝93から出土した土器は、溝底直上付近でまとまった状態で出土していることや完形に近い個体が多いことなどから、周溝内ないしは周溝外肩部に供献されたものとみられる。高杯や壺の一部は穿孔される。供献された土器類はIV-1様式に属するものであるが、南辺溝93の埋土からIV-2様式に属する弥生土器が出土しており、周溝の埋没時期はIV-2様式に並行する時期と考えられる。

**方形周溝墓2 (図10～12)** 溝96を東辺溝として方形周溝墓1と共有し、溝111を北辺溝、溝95を南辺溝とする推定規模13m前後の方形周溝墓である。西辺溝は調査区外に位置すると推定される。方形周溝墓1と同じく、角部では周溝が繋がらず途切れている。主体部は検出していない。

3ライン及びCライン沿いに設定した断割の断面観察では、地山の上に墳丘盛土の可能性のあるにぶい黄褐色粘土層を検出した。南辺溝95は検出面からの深さが0.4mを測るが、北辺溝111は検出面からの深さは0.2m程度である。南辺溝95から高杯、壺、甕、石包丁等が出土した。周溝の中程からまとめて出土しているが、溝93と比べ壺や甕がやや破片化している。墳丘裾部に供献された土器が周溝内に転落した可能性がある。高杯の杯部には穿孔が見られる。出土遺物はIV-1様式に属し、方形周溝墓1とほぼ同時期である。

## 〔土坑〕

**土坑92 (図13)** 4D・5D・4E・5E区で検出した土坑である。方形周溝墓1の南辺溝である溝93を切る。平面形は不正円形を呈し、長軸2.73m、短軸2.12mである。深さは検出面より0.58mである。底面はほぼ平坦である。埋土は、黒褐色粘質シルト、暗灰黄色粘質シルト、黒色粘土である。遺物はIV-2様式に属する弥生土器が出土している。

### 3 出土遺物

今回の調査では、コンテナ 10 箱分の遺物が出土した。出土遺物の大半は、方形周溝墓の周溝から出土した弥生土器である。その他には、主に柱穴から出土した中世の土器類、耕作溝から出土した近世の土器類がある。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ数	A ランク点数	B ランク箱数	C ランク箱数
弥生時代	弥生時代、石製品		弥生土器 22 点 石製品 2 点		
平安時代	須恵器、瓦		須恵器 1 点 瓦 1 点		
鎌倉・室町時代	土師器、瓦器、 施釉陶器		土師器 1 点 瓦器 5 点		
江戸時代	施釉陶器、染付、 瓦		瓦 1 点		
合計		10 箱	33 点 (9 箱)		1 箱

#### (1) 弥生土器 (図 14・15)

方形周溝墓 1 (図 14・15 1～12) 方形周溝墓 1 の遺物は、南辺溝 93 (1～10) と西辺溝 96 (11・12) から出土した。

南辺溝 93 の遺物は、高杯 (1・2・8・9)、水差 (3)、壺 (4～6)、甕 (7・10) がある。1～7 が供献遺物で、8～10 が溝の埋没に伴う遺物である。

高杯には木器を模した水平口縁のもの (1・2) と皿状杯部のもの (8) がある。1 は杯部が内湾気味に立ち上がり、水平に外方に延びる口縁部から、端部は短く垂下する。垂下する端部は、ナデにより緩く外反する。杯部と脚部の接合は、円盤充填方式である。脚部及び杯部外面は縦方向のミガキ、杯部内面は横方向のミガキを施す。2 は杯部が外反して立ち上がり、口縁端部はやや開き気味に垂下する。杯部には穿孔が見られる。杯部と脚部の接合は、円盤充填方式である。口縁端部に 8～9 個単位の円形浮文を付す。脚部及び杯部外面は縦方向のミガキ、杯部内面は横方向のミガキを施す。1・2 共に摂津からの搬入品とみられる。8 は口縁部が稜を持ち立ち上がり、端部は内面に肥厚する。杯部と脚部の接合は、円盤充填方式である。杯体部内外面は縦方向のミガキ、口縁部内外面は横方向のミガキを施す。口縁部外面に 4 条の凹線文が巡る。9 は裾部片である。破片であるため底径を復元していない。下外方に屈曲し、端部は下方に肥厚し面を持つ。表面は磨滅し調整は不明瞭である。

水差 (3) は算盤玉形の体部中程に最大径を持ち、体部上端に把手が付く。頸部は外傾気味に立ち上がり、把手側の口縁部を切り欠く。口縁部は 2 条の凹線文、頸部は波状文が巡る。体部上位は櫛描の波状文と直線文が交互に巡る。体部最大径付近は横方向のミガキを施す。体部下半はケズリを行い、底部はナデ調整で平坦な底面に仕上げる。

壺は細頸壺 (4) と広口壺 (5・6) がある。4 は脚台付細頸壺である。最大径が体部下方にあ

る算盤玉形の体部から細い頸部が緩く外傾して立ち上がり、口縁部は僅かに内傾する。脚台は下外方に広がる漏斗状であり、端部が上外方に肥厚する。体部下方に穿孔が見られる。口縁部に4条のA種凹線文が巡る。体部上半の中程に円形浮文が付され、その下に3条の直線文が巡る。直線文の間には波状文が巡る。脚部及び体部下半外面は縦方向のミガキ、体部最大径付近は横方向のミガキを施す。体部上半及び頸部は表面の磨滅により調整が不明瞭であるが、ミガキの痕跡が若干見られる。撰津からの搬入品とみられる。5・6は広口壺である。いずれも体部中央のやや上位に最大径を持ち、頸部は段をもって屈曲し上外方に短く立ち上がり、口縁部が外方に屈曲する。口縁端部は、上下方に肥厚し面を持つが、5は厚く肥厚し6は僅かに肥厚する。体部外面の調整は、底部付近がケズリ後ナデ、下半部がケズリ後タテハケ、上半部がタタキ後タテハケである。頸部外面はヨコハケを施し、口縁部はナデで調整し、端部は無文である。内面の調整は、底部から体部下半部までナデ、体部上半部はタテハケを施す。

甕（7・10）は口縁部片と底部片がある。7は口縁部が強く外面に屈曲し、端部は面を持つ。口縁端部にキザミを施す。口縁部は外面がタタキ後ナデ、内面はヨコハケを施す。体部は外面がタテハケ、内面は不明瞭であるがナデと考えられる。10は底部片である。底面は中央が窪む。体部外面はタテハケ、内面はナデを施し、底部は内外面ともナデを施す。

西辺溝96の出土遺物は、水差（11）と壺（12）がある。11は脚台付の水差である。算盤玉形の体部から頸部がやや外傾して上方に立ち上がり口縁部は上方に端面を持つ。体部の上端に把手を貼付ける。脚台は下外方に直線的に延び、裾部は外方に屈曲する。端部は上下方に肥厚する。体部と脚台の接合部は円盤充填方式であり、円盤が欠損する。口縁部上位に扇状文を2段巡らせる。体部上半部は波状文、直線文、刺突文を交互に巡らせる。体部下半部から脚台にかけては最大径付近と接合部に横方向のミガキ、それ以外には縦方向のミガキを施す。12は壺底部である。

**方形周溝墓2（図15 13～18）** 方形周溝墓2の遺物は、南辺溝95（13～17）、北辺溝111（18）から出土した。

南辺溝95の遺物は、高杯（13・14）、壺（15・16）、甕（17）がある。

13は木器を模した水平口縁の高杯である。杯部はほぼ直線的に上外方に立ち上がり、口縁部は下がり気味に外方に延びる。端部は内側に垂下する。脚部は中空で、裾部は下外方に広がり端部が上下方に肥厚し面を持つ。杯部と脚部の接合部は円盤充填方式である。杯部下位に穿孔が見られる。脚部から杯部外面及び杯部内面は縦方向のミガキを施す。14は裾部片である。裾部が外方に屈曲し、端部は上方に肥厚する。

15は壺もしくは水差の底部から体部片であると考えられる。体部は算盤玉形を呈する。体部外面は、底部付近はケズリ、最大径付近は横方向のミガキを施す。体部内面はナデを施す。16は広口壺である。上部と下部が直接接合しないが、胎土や調整から同一個体と考える。頸部は段を持ち屈曲して上外方に立ち上がり、口縁部は強く外方に屈曲する。端部は上方に肥厚する。頸部外面はタタキ、体部外面上位はタタキ後ハケ、体部最大径付近はハケ、体部外面下位は縦方向のミガキを施す。体部内面から頸部内面はハケ調整を施す。



图14 出土遺物1 (弥生土器1:4)



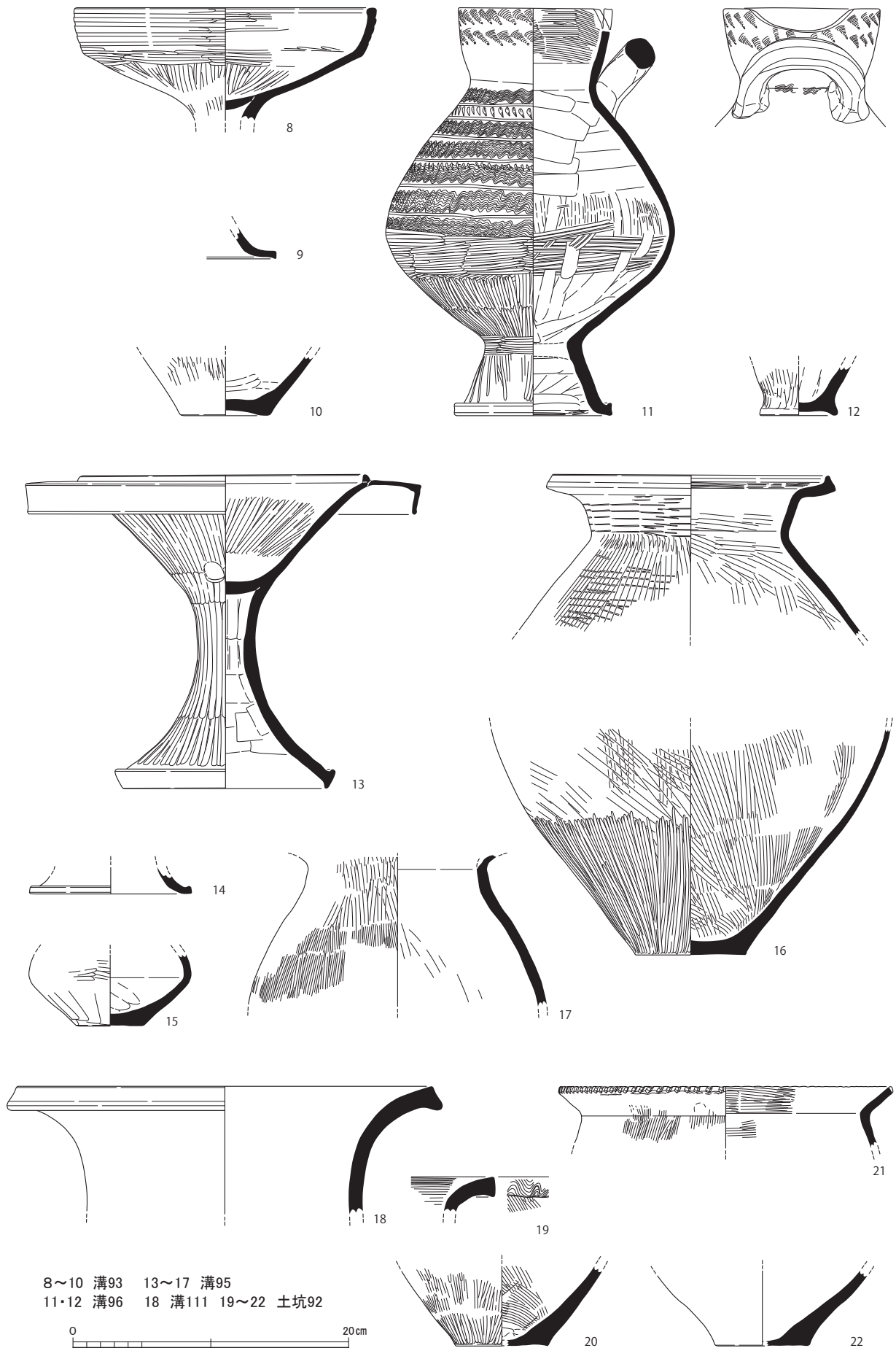


图15 出土遺物2 (弥生土器1:4)

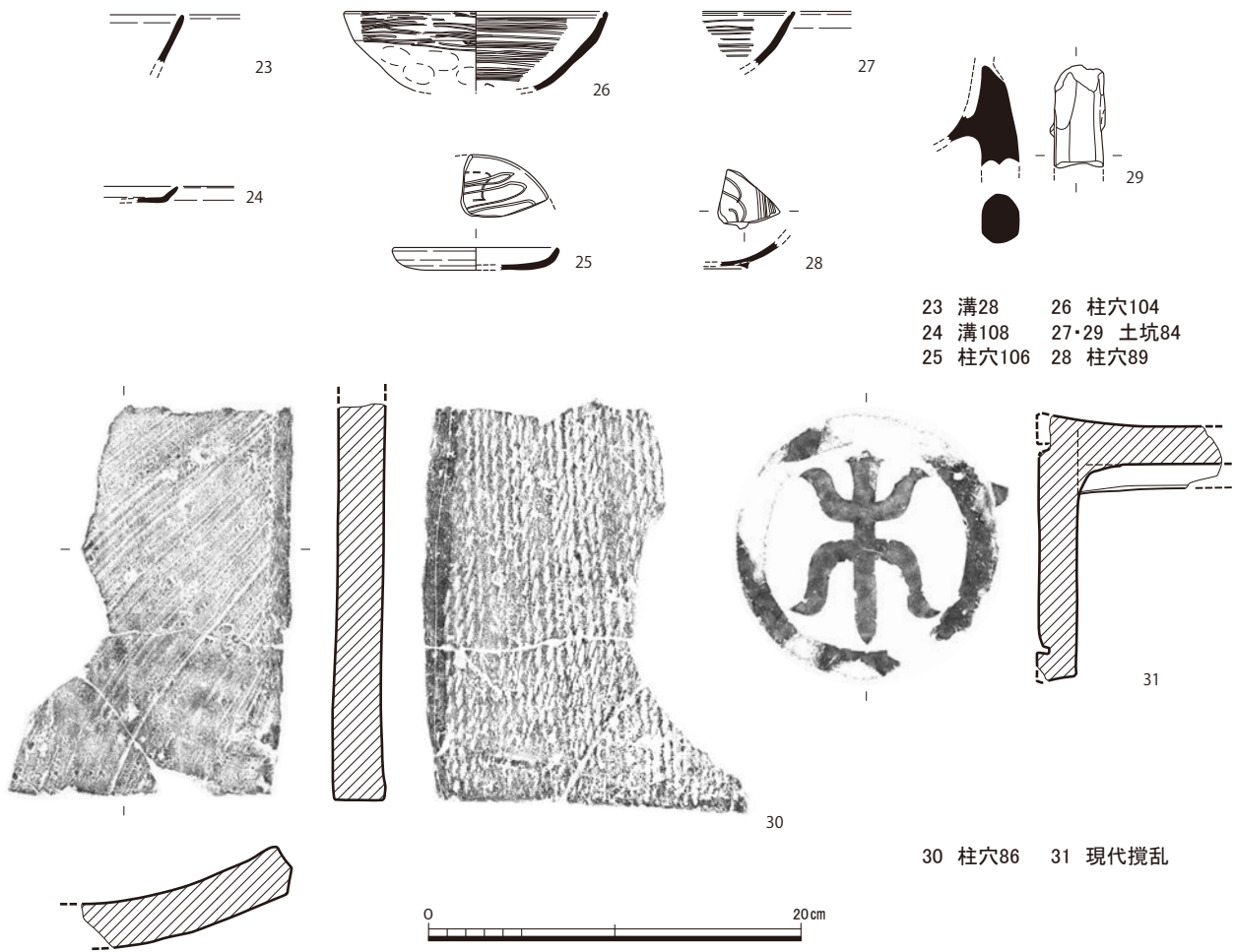


图16 出土遺物3 (平安・鎌倉時代、瓦1:4)



图17 出土遺物(瓦)

17は甕の体部片である。くの字に屈曲して外反する口縁部が付くと考えられる。体部外面はタテハケ、内面はハケ後ナデ調整を施す。

北辺溝 111 の遺物は広口壺(18)がある。口縁部が外反し、端部は下方に肥厚する。表面が磨滅し、調整は不明瞭である。

土坑 92 (図 15 19～22) 土坑 92 の遺物は壺 (19・20) と甕 (21・22) がある。

壺は広口壺がある。19は広口壺の口縁部である。口縁部が外方に屈曲し、端部は幅が厚くなり面を持つ。口縁部端面に櫛描の波状文が巡る。20は壺の底部片である。体部外面は縦方向のミガキ、内面はハケ調整である。

21は甕の口縁部片である。口縁部がくの字に屈曲し端部は面を持つ。口縁端部にキザミを施す。体部外面はタテハケ、体部内面及び口縁部内面はヨコハケを施す。22は甕もしくは壺の底部片である。表面が磨滅して、調整は不明瞭である。

#### (2) 平安時代以降の土器 (図 16 23～29)

平安時代の遺物は出土数が少なく、図示できたものは1点のみである。23は須恵器杯の口縁部片である。細片のため口径を復元できなかった。

鎌倉時代の遺物は、土師器 (24)、瓦器 (25～29) がある。

土師器は皿 (24) がある。破片のため口径が復元できないが、8cm前後の皿であろう。器高 0.9 cm の小型の皿である。

瓦器は皿 (25)、椀 (26～28)、羽釜 (29) がある。25は口径 8.7 cm、器高 1.2 cm の皿で、見込みにミガキによる暗文を施す。26・27は口縁部内側に沈線が1条巡る樟葉型の椀である。26は口縁部内外面及び体部内面にミガキを施す。内面のミガキは細かく施される。見込み付近には、ミガキによる螺旋状暗文の一部が見られる。27は内面にのみミガキが施される。28は椀の底部片である。断面三角形の高台が張り付けられる。見込みにはミガキによる螺旋状の暗文が施され、体部内面は横方向のミガキが密に施される。29は三足羽釜の脚部片である。

#### (3) 瓦 (図 16・17 30・31)

瓦は平瓦 (30) と軒棧瓦 (31) がある。30は平安時代の平瓦である。凸面に縦縄叩きが施され、凹面に布目が見られる。柱穴 86 の根石として用いられていた。31は軒棧瓦の軒丸部である。直径 14.3 cm を測る。瓦当文様は丸に剣木の字文である。

#### (4) 石製品 (図 18 32・33)

石製品は石包丁 (32) とスクレイパー (33) がある。32は粘板岩製の石包丁である。幅 7.1 cm、厚さ 0.6 cm。体部、刃部、背部の全体を研磨している。2箇所直径 0.6 cm 程の円孔を穿つ。円孔は両面穿孔である。33はサヌカイト製のスクレイパーである。原礫面を一部に残す。横断面は三角形を呈する。腹面からの片面調整である。

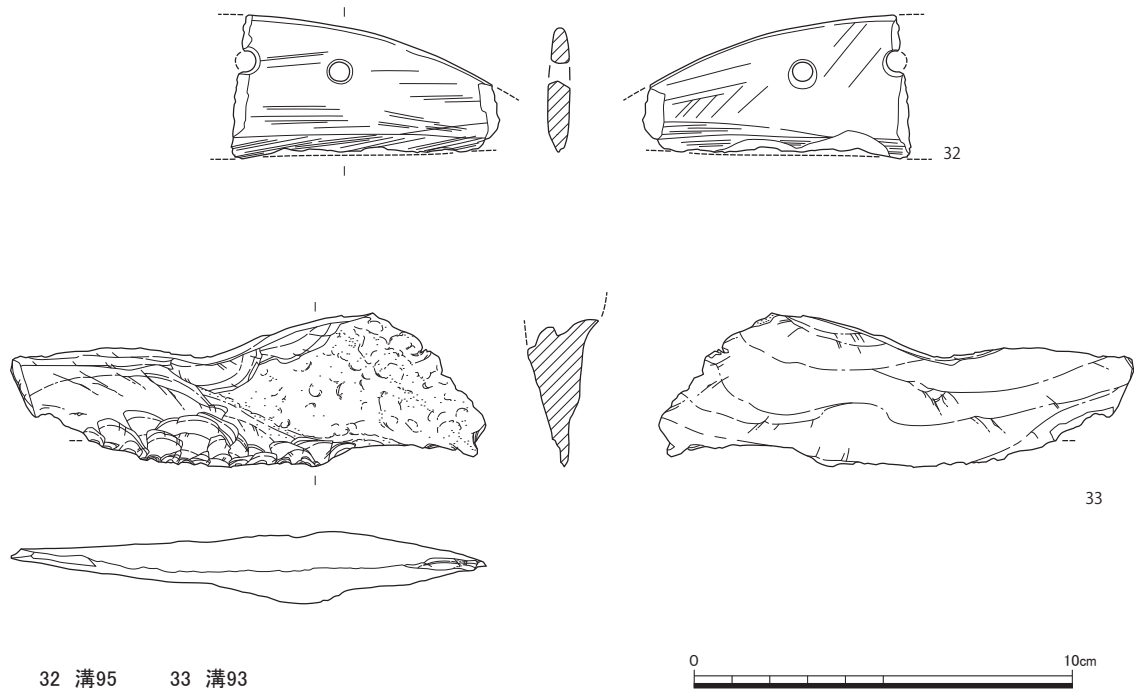


図18 出土遺物4 (石製品1:2)

参考文献

- 森田克行「3 各地域の様式編年 7 摂津地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』木耳社 1990年  
森岡秀人「3 各地域の様式編年 8 山城地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』木耳社 1990年  
釋龍雄「二章 原始・古代の展開 第二節 ムラからクニへ」『山城町史』本文編 山城町役場 1987年  
『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 真陽社 1995年  
奥村清一郎・岩松 保・森島康雄・高野陽子『市田齐当坊遺跡』京都府遺跡調査報告書 第36冊  
公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2004年



## 第Ⅳ章 まとめ

今回の調査では、弥生時代の方形周溝墓2基、鎌倉時代の建物や柵と推定される柱穴群、室町時代と推定される土坑、近世以降の耕作に関する溝や土坑を検出した。また、当初検出が想定された長岡京期に関する遺構は検出されなかった。以下に、各時代の成果を記述する。

**弥生時代** 検出した方形周溝墓2基は、一辺約13mの規模で、南北溝96を共有して東西に並んで構築されている。主体部は検出されず、周溝墓2には墳丘盛土の可能性のある土の堆積が見られたが周溝墓1では墳丘盛土は確認できなかった。周溝墓の角部では周溝が繋がらず途切れている状況であった。

周溝墓1から出土した高杯(1・2)、脚台付細頸壺(4)は円形浮文を用いた装飾、胎土が灰白色を呈することなどから摂津からの搬入品であると考えられ、被葬者との関係が注目される。供献された土器群は、高杯・水差・広口壺・細頸壺などがセット関係として見られる。供献された土器群の時期は、壺や甕に凹線文があまり見られないこと、高杯や細頸壺に付された円形浮文に皿様式的要素も見られる点からⅣ-1様式に属すると考えられる。周溝墓1の南辺溝93埋土から出土した土器には、杯部が皿状を呈し、口縁部に凹線文を施すⅣ-2様式に属する高杯(8)が確実に含まれることから、今回検出した周溝墓はⅣ-1様式の時期に構築、祭祀が行われ、Ⅳ-2様式の時期に埋没したものと考えられる。周溝墓1・2の出土遺物に時期差は見られず、併存していたと考えられる。

本調査地南東に位置する東土川遺跡の範囲内では、名神高速道路桂川サービスエリア建設に伴う一連の調査<sup>(1)</sup>において、弥生時代中期の方形周溝墓や水田跡が多く検出されている。この調査で検出された方形周溝墓は、一辺10～17mの規模で、出土遺物は中期中葉～後葉(Ⅲ～Ⅳ様式併行)に属すると報告されていることから、今回検出した方形周溝墓はこれらと同規模で、同時期に存在したと考えられる。本調査地の約200m西で実施された左京第421次調査<sup>(2)</sup>においても、水田に伴うと推定される畦畔状遺構や溝群、土坑状遺構、方形周溝墓が検出され、出土遺物はⅣ-1～2様式に属する。現在想定される東土川遺跡の周辺にも同時期の集落が広がっていた可能性は高く、今後の調査で当該期の更なる成果が期待される。

**長岡京期** 左京第421次調査の成果から、調査区の北半で一条条間大路の路面及び南北側溝の検出が想定されたが、一条条間大路に関する遺構及び当時期に属する遺構は検出されなかった。遺物の出土も非常に少ない。工場の建設、解体に伴う攪乱が著しく、削平により遺構が消失した可能性も考えられるが、本調査地より100m東の地点で実施された西羽東師川河川改修に伴う調査<sup>(3)</sup>においても一条条間大路に関する遺構及び当時期に属する遺構は検出されていない。本調査地の北で実施された左京第203次・340次調査では長岡京造営にかかわる物資を運送したと想定される流路が検出された。流路は本調査地の東側を南流すると想定され、その影響により周辺では道路や宅地の整備が及んでいない可能性もあろう。

**鎌倉・室町時代** 鎌倉時代は、調査区南半で柱穴群を検出した。調査区南端では、調査区外南に

延びると考えられる掘立柱建物の一部を検出し、調査区中央付近では東西方向の柵の可能性のある柱穴群を検出した。これらの柱穴からは、12世紀末頃の特徴を持つ瓦器が出土している。柵状に並ぶ柱穴列より北では鎌倉時代の遺構は検出せず、建物等は調査区より南に分布すると推定される。

室町時代は、調査区北東部で土坑3基を検出した。遺物は細片が出土したのみで遺構の性格を推定し難いが、平面方形を呈しほぼ垂直に掘り込まれる形状から土壙墓の可能性を考える。しかしながら、土坑の軸線方向は近世の耕作溝と同方向であり、導水路である溝79・80の傍に位置する状況から、近世の耕作に伴う遺構である可能性もある。

江戸時代～近現代 江戸時代以降は、耕作溝や耕作に伴うと考えられる土坑などを検出した。耕作溝は2時期の切合いが見られ、新しい耕作溝からは現代の遺物が出土している。近世以降に耕地化した後は、現代に至るまで耕作地として利用された状況を示している。調査区の南北で耕作溝の軸線方向が異なり、土地の区割を示すと考えられる。現代の耕作溝も、近世とほぼ同一の軸線であることから、近世以降の区割が現代まで踏襲されていることを確認した。

#### 文献注

- (1) 野島 永・中川和哉・小池 寛・岩松 保・平良泰久『長岡京跡左京二条三・四坊 東土川遺跡』京都府遺跡調査報告書 第28冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2000年
- (2) 中塚 良・山口 均「5 長岡京跡左京第421次(7 AND TD-3地区)～一条条間大路・東三坊坊間西小路交差点、一条条間大路・東二坊大路交差点、左京一条三坊二・三・六・七町～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第57集 財団法人向日市埋蔵文化財センター
- (3) 吉崎 伸「第1章 VI 長岡京跡 36 長岡京左京一条三坊・東土川遺跡」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年

表3 遺物観察表

報告 番号	器種	器形	遺構	地区	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	色調		焼成	胎土	調整	備考		
									(内・外)	(断)						
1	弥生 土器	高杯	溝 93	6D	23.4	12.9	18.0	4/5	灰白色	10YR8/2	-	-	良	密(φ20mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子)	(内) ミガキカ・円盤充填・ナデ・絞り痕・ナデか・ヨコナデ (外) ヨコナデ・ミガキカ・ヨコナデ	
2	弥生 土器	高杯	溝 93	6D	32.0	15.3	25.5	4/5	灰白色	10YR8/2	-	-	良	密(φ20mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子)	(内) ミガキ・ナデ・ミガキ・円盤充填・絞り痕・ケズリ・ヨコナデ (外) ヨコナデ・円形浮文・ナデ・ミガキ・ケズリのちミガキ・ヨコナデ	打ち欠き有
3	弥生 土器	水差	溝 93	5D	8.7	5.4	19.0	3/5	灰白色	10YR8/2	-	-	良	密(φ10mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子)	(内) ヨコナデ・ハケのちナデ・ナデ (外) ヨコナデ・凹線文(3条)・波状文(4段)・直線文(3条)・ミガキ・ケズリ・ナデ	黒斑有(外面)
4	弥生 土器	壺	溝 93	6D	4.8	8.8	25.5	ほぼ 完形	(外) 灰白色 (内) 暗灰色	(外) 10YR8/2 (内) N3/0	-	-	良	密(φ30mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子)	(内) ヨコナデ・ナデ・絞り痕・ナデ・ハケ・ナデか・ヨコナデ (外) ヨコナデ・凹線文(4条)・ミガキカ・円形浮文・波状文・直線文(3条)・ナデか・ミガキ・ヨコナデ	黒斑有(外面)、 打ち欠き有
5	弥生 土器	壺	溝 93	6D	21.6	7.4	(34.7)	2/5	灰白色	10YR8/2	-	-	良	密(φ20mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子)	(内) ヨコナデ・ハケ・ナデ (外) ヨコナデ・ハケ・タタキのちハケ・ケズリのちハケ・ケズリのちナデ・ナデ	
6	弥生 土器	壺	溝 93	5D	20.3	6.0	35.9	3/5	灰白色	2.5Y8/1	-	-	良	密(φ20mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子)	(内) ヨコナデ・ナデか・ハケ・ナデ (外) ヨコナデ・ハケのちナデ・ハケ・タタキのちハケ・ケズリのちハケ・ケズリのちナデ・ナデ	煤附着(外面)
7	弥生 土器	甕	溝 93	5D	16.5	-	(4.0)	1/4	にぶい 橙色	7.5YR7/3	-	-	良	密(φ20mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子)	(内) ハケ・ナデか (外) ヨコナデ・キザミ・タタキのちナデ・ハケのちナデか	煤附着(外面)
8	弥生 土器	高杯	溝 93	5D	21.5	-	(8.2)	3/4	にぶい 橙色	7.5YR7/4	-	-	良	密(φ20mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子)	(内) ヨコナデ・ミガキカ・ミガキ・円盤重鎮・絞り痕 (外) ヨコナデ・凹線文(4条)・ミガキ・ケズリのちミガキ	黒斑有(外面)
9	弥生 土器	高杯	溝 93	5D	-	-	(2.4)	破片	灰白色	10YR8/2	-	-	良	密(φ20mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子)	(内) 摩滅 (外) ハケか・ヨコナデか	
10	弥生 土器	甕	溝 93 上層	5D・6D	-	6.0	(4.3)	底部 1/1	灰白色	10YR8/2	-	-	良	密(φ40mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子)	(内) ナデ (外) ハケ・ナデ	
11	弥生 土器	水差	溝 96	4C	11.2	11.1	29.6	9/10	浅黄 橙色	10YR8/3	-	-	良	密(φ20mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子)	(内) ヨコナデ・ハケ・ケズリのちナデ・ナデ・工具痕か・ヨコナデ・ナデ・ハケ・ヨコナデ (外) ヨコナデ・扇状文(2段)・ナデ・波状文(6段)・直線文(6条)・刺突文(2段)・ミガキ・タテ方向ケズリのちミガキ・ヨコナデ	黒斑有(内面)
12	弥生 土器	壺	溝 96	4B・4C	-	5.4	(3.6)	底部 1/1	灰白色	10YR8/2	-	-	良	密(φ20mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子)	(内) ナデ (外) ハケ・オサエ・ナデ	
13	弥生 土器	高杯	溝 95	2D・3D	20.4	14.6	22.8	9/10	灰白色	7.5YR8/2	-	-	良	密(φ30mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子)	(内) ヨコナデ・ミガキ・ナデ・円盤充填・ナデか・ケズリ・ヨコナデ(外) ヨコナデ・ケズリ・ミガキ・ヨコナデ	打ち欠き有
14	弥生 土器	高杯	溝 95 上層	2D・3D	-	10.7	(2.0)	1/8	浅黄 橙色	7.5YR8/4	-	-	良	密(φ20mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子、φ6.0mm大の礫)	(内) ハケか・ヨコナデ (外) 摩滅 ヨコナデ	
15	弥生 土器	壺?	溝 95	2D・3D	-	4.7	(5.2)	1/2	灰白色	2.5Y7/1	-	-	良	密(φ20mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子)	(内) ナデか・ナデ (外) ミガキ・ケズリ・ナデ	
16	弥生 土器	壺	溝 95	2D・3D	20.0	8.0	(28.0)	2/5	にぶい 黄橙色	10YR7/2	-	-	良	密(φ20mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子)	(内) ヨコナデ・ハケ・ヨコナデ・ハケ (外) ヨコナデ・タタキ・タタキのちハケ・ハケ・ハケのちミガキ・ナデ	黒斑有(外面)
17	弥生 土器	甕	溝 95	2D・3D	-	-	(10.8)	1/4	浅黄 橙色	10YR8/3	-	-	良	密(φ30mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子)	(内) ナデ・ハケのちナデ (外) ハケ	
18	弥生 土器	壺	溝 111	2A	30.0	-	(9.3)	1/8	橙色	7.5Y7/6	-	-	良	密(φ40mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子)	(内) 摩滅のため調整不明 (外) ヨコナデ・ハケか	
19	弥生 土器	壺	土坑 92 下層	4D・5D	-	-	(2.5)	破片	灰白色	2.5Y8/2	-	-	良	密(φ20mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子)	(内) ハケ (外) ヨコナデ・波状文・ハケ	

長岡京跡左京一条三坊十・十一町発掘調査 (2018)

報告 番号	器種	器形	遺構	地区	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	色調			焼成	胎土	調整	備考	
									(内・外)	(断)	(断)					
20	弥生 土器	壺	土坑 92 下層	4D・5D	-	6.6	(5.8)	2/5	灰白色	2.5Y8/2	-	-	良	密(φ20mm以下の長石・ 石英・チャート・雲母・ 黒色粒子)	(内) ハケ・ナデ (外) ミガキ・ナデ	
21	弥生 土器	甕	土坑 92 中層	4D・5D	24.0	-	(4.5)	1/8	灰白色	10YR8/2	-	-	良	密(φ20mm以下の長石・ 石英・チャート・雲母・ 赤色粒子)	(内) ハケ (外) ヨコナデ・キサミ・ ナデ・ハケのちナデ・ハ ケ	黒斑有(外面)
22	弥生 土器	甕	土坑 92 下層	4D・5D	-	6.4	(5.5)	1/3	(外) 暗赤褐色 (内) 灰白色	(外) 2.5Y7/4 (内) 2.5Y7/1	-	-	良	密(φ20mm以下の長石・ 石英・チャート・雲母・ 赤色粒子)	(内) 摩滅のため調整不明 (外) タタキのちハケか・ ナデ	
23	須恵 器	杯	溝 28	4B・5B	-	-	(2.6)	破片	灰白色	N7/0	-	-	良	密(φ10mm以下の長石・ 石英・チャート・黒色 粒子)	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	
24	土師 器	皿	溝 108	3C	-	-	0.9	破片	灰白色	10YR8/2	-	-	良	密(φ10mm以下の長石・ 石英・チャート・雲母・ 赤色粒子)	(内) ヨコナデ・ナデ (外) ヨコナデ・オサエ	
25	瓦器	皿	柱穴 106	4E	8.7	-	1.2	1/5	暗灰色	N3/0	灰白色	N7/0	良	密(φ10mm以下の長石・ 石英・チャート)	(内) ヨコナデ・ナデ・暗 文 (外) ヨコナデ・オサエ	
26	瓦器	椀	柱穴 104	4D・4E	14.0	-	(4.3)	1/6	暗灰色	N3/0	灰白色	N8/0	良	密(φ10mm以下の長石・ 石英・チャート・雲母)	(内) ヨコナデ・沈線・ナ デのちミガキ・暗文 (外) ヨコナデ・ミガキ・ オサエ	
27	瓦器	椀	土坑 84	6B	-	-	(2.9)	破片	灰白色	10YR8/1	灰白色	10YR8/1	不良	密(φ10mm以下の長石・ 石英・チャート)	(内) ヨコナデ・ナデのち ミガキ (外) ヨコナデ・オサエ	炭素吸着してい ない
28	瓦器	椀	柱穴 89	5F	-	-	(1.5)	破片	暗灰色	N3/0	灰白色	N8/0	良	密(φ10mm以下の長石・ 石英・チャート)	(内) ナデ・ミガキ・暗文 (外) オサエ・貼付高台・ ナデか	
29	瓦器	羽釜 (脚)	土坑 84	6B	-	-	(5.5)	破片	灰色	N4/0	灰白色	N8/0	良	密(φ20mm以下の長石・ 石英・チャート・雲母)	(内) 摩滅 (外) ケズリのちナデ・貼 付ナデ	
30	瓦	平瓦	柱穴 86	5F	(残存長) 21.3	(残存幅) 16.5	(厚) 2.5		灰色	N4/0	灰白色	N8/0	良 (軟質)	密(φ20mm以下の長石・ 石英・チャート・黒色 粒子)	(凸面) 縄目・ケズリ、(凹 面) ナデ・糸切りのち布 目	煤付着(凹面)
31	瓦	軒椀瓦 (軒丸 部)	現代 攪乱		(径) 14.3	(残存長) 10.7	-		暗灰色	N3/0	灰白色	N8/0	良 (硬質)	密(φ40mm以下の長石・ 石英・チャート・雲母・ 黒色粒子)	(凸面) ナデ・ケズリ・范、 (凹面) ナデ・ケズリ	凸面ハナレ砂 (雲母粉)

# 図 版







1. 調査前（南東から）



2. 調査区全景（北から）





1. 溝79、80（南東から）



2. 調査区南部鎌倉時代柱穴群  
（東から）



3. 柱穴86断面（北から）





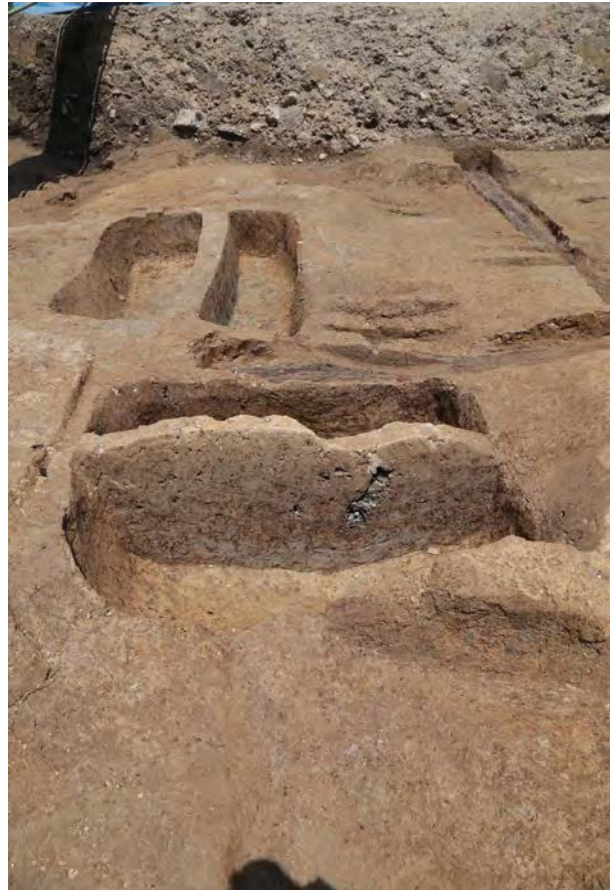
1. 土坑82、83、84（北東から）



2. 土坑82断面（南西から）



3. 土坑83断面（南西から）



4. 土坑84断面（南東から）





1. 方形周溝墓1 (南から)



2. 溝93断面 (西から)



3. 溝96断面 (南から)



1. 溝93遺物出土状況1  
(北東から)



2. 溝93遺物出土状況2  
(北西から)



3. 溝96遺物出土状況  
(南東から)







1. 方形周溝墓2 (南から)



2. 溝95断面 (東から)



3. 溝95遺物出土状況1 (南から)



1. 溝95遺物出土状況2  
(西から)



2. 溝111 (南から)



3. 溝111断面 (西から)







1. 土坑92検出状況（南から）



2. 土坑92（北西から）

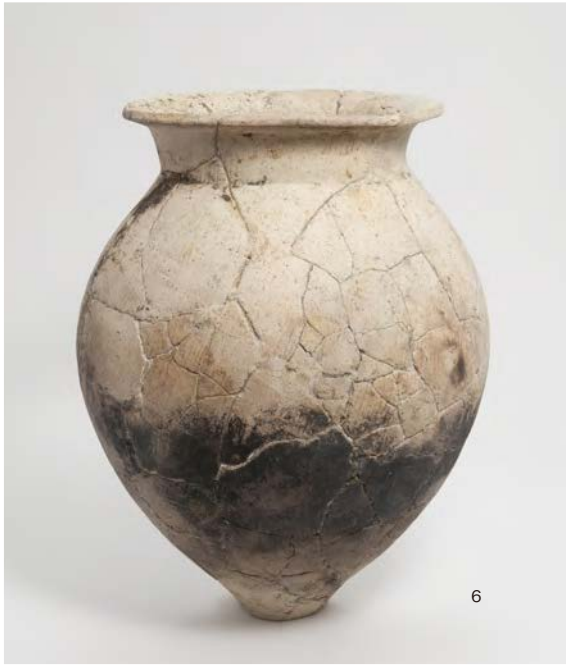


3. 土坑92、溝93断面  
（西から）

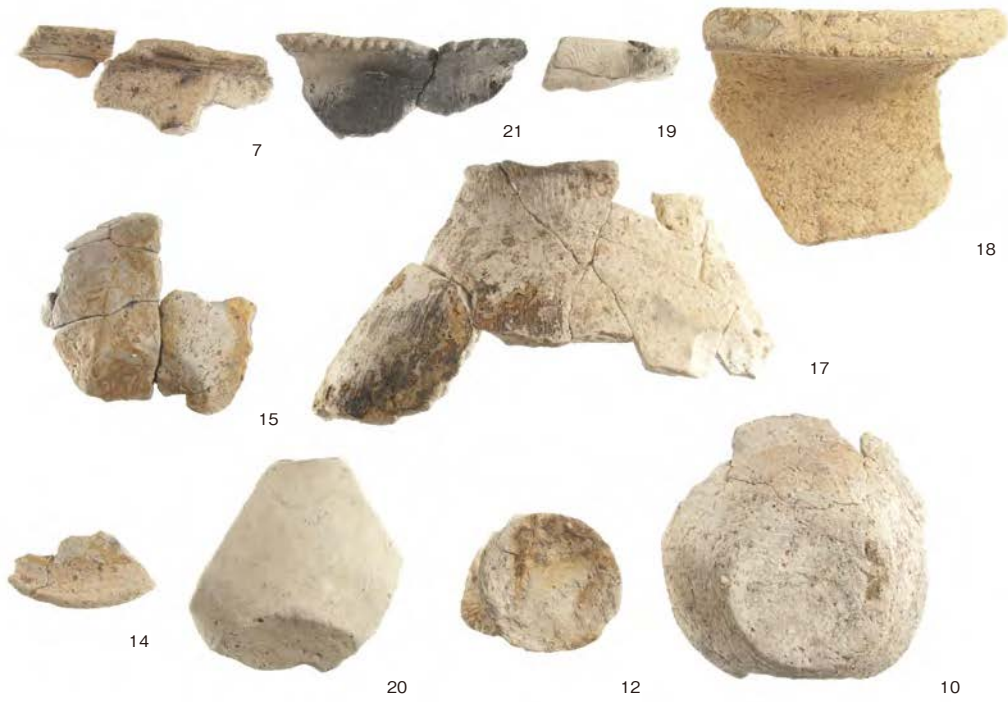




出土遺物 - 1 (弥生土器)



出土遺物-2 (弥生土器・石製品)



1. 出土遺物 - 3 (弥生土器)



2. 出土遺物 - 4 (平安・鎌倉時代)



## 報告書抄録

ふりがな	ながおかしやうあとさきやういちじやうさんぽうじゆう・じゆういちぢやうはつかつちやうさほうこくしよ							
書名	長岡京跡左京一条三坊十・十一町発掘調査報告書							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	大西晃靖 辻 純一 野地ますみ							
編集機関	株式会社 文化財サービス							
所在地	〒612-8372 京都市伏見区北端町58							
発行所	株式会社 文化財サービス							
発行年月日	2018年8月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかしやうあと 長岡京跡	きやうとしみなみくくぜ 京都市南区久世 ひがしつちかわちやう 東土川町 17-1ほか6ひつ 17-1他6筆	26100	3	34度 56分 53秒	135度 43分 6秒	2018年 6月6日～ 2018年 7月11日	460㎡	工場建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
長岡京跡	都城	弥生時代	方形周溝墓 土坑	弥生土器	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 弥生時代中期の方形周溝墓を検出し、東土川遺跡周辺の集落の広がりを確認した。</li> <li>・ 鎌倉時代の掘立柱建物の一部及び東西方向の柵を検出し、当該期の建物はトレンチの南外に広がる可能性を確認した。</li> <li>・ 江戸時代以降の耕作に伴う溝や土坑を検出した。耕作溝の軸線方向から、土地の区画を確認した。</li> </ul>			
		平安時代		須恵器				
		鎌倉～室町時代	掘立柱建物 柵 柱穴 土坑	土師器 瓦器				
		江戸時代以降	耕作溝 ビット 土坑	陶磁器類 瓦				



# 長岡京跡左京一条三坊十・十一町 発掘調査報告書

発行日 2018年8月31日  
編集 株式会社 文化財サービス  
発行 京都市伏見区北端町58番地  
〒612-8372 TEL 075-611-5800

印刷 三星商事印刷株式会社  
京都市中京区新町通竹屋町下る  
〒604-0093 TEL 075-256-0961